
誰かの味方

桜楼月華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰かの味方

【Nコード】

N2856U

【作者名】

桜楼月華

【あらすじ】

正義に成ろうとして成れなかった男に憧れ、正義を受け継ごうとした男は死んだ。名前を忘れ、あの世へと送られた。そこであった少女は桐谷唯。銀髪の日本人。そこに、名も知れぬ男は違和感を覚える。そして、聞こえてしまった唯の独り言。「お兄ちゃん」という言葉。

頭痛が意味するのは記憶の回復なのか。それとも……。

死

——正義の味方になろうとした男がいた。

そいつは、目指し続けた。

ある日は、十人の内、一人のために九人を殺した。

ある日は、百人の内、七十五人のために二十五人を殺した。

そんな、正義の味方になり、その理想を抱いた男は、簡単に裏切られ、殺された。

裏切られて尚、男は憎み、恨み、呪うことすらしなかった。

そんな正義、くだらないと言ってしまえばそこまでなのだろう。狂っている、とも言うのだろう。

人を殺さなければ正義を成せないというこの世界。

だけど、その正義を受け継ごうと思った男がいた。しかし、その男も結局、正義には成りきれなかった。

記憶に残るは、銃声。剣と剣が交わる甲高い音。空からは、戦闘機が飛ぶ音。

記憶に残るは、詠唱。魔力と魔力がぶつかる爆発音。空からは、幾億もの剣が降る音。

そんな、科学と魔法の世界を渡り歩き、偽善を背負った男は……。

只今、二〇一一年。十二月二四日。三時五十六分。俺は、そんな世界に別れを告げた。

死

「ん、……ここは」

目を覚ましたのは、ベッドの上だった。しかし、ベッドの色は赤黒く染まっており、血を連想させる。壁は黒く、光もない。ベッドの色以外、分かることは何一つとして無かった。

正直、居心地が悪かった。何も、見えない筈なのに。まるで周りに、沢山の人に監視されている。そんなありもしない妄想をして、悪寒を走らせた。

だが、まず一番最初に疑問を持つべきことがある。

「……ここは、どこだ」

真っ暗で一メートル先も見えない。俺から見た右側に壁があるようだが……黒い。まるで、そこに触れれば永遠の闇に食われてしまうような錯覚を覚えた。なんのヒントもない、その部屋に一つ。落ち着いた、だけど、幼子の様な声が聞こえた。

「あなたは、誰？」

部屋に反響してどこから発せられた声なのか分からない。

そして、もう一つ。分からないことがあった。

——俺は誰だ。

「あなたは、誰？」

もう一度、聞こえた声。

何も、答えられない。しかし、自然とこんな言葉が口から零れた。

「正義の味方を目指した男」

「……悲しい声ね。もう諦めてしまっているの？」

彼女の問いに、俺はなんて答えよう。

今の自分は、もう正義の味方を諦めている。それは、感覚的に悟った。しかし、諦めたという言葉はなんてカッコわるいのだろう。心の中でなんども復唱して、思った。

「そうだな。もう、諦めてしまっているのかもしれない」

どんなにカッコわるかろうと、きつとこれが事実なのだろう。

だって、聞こえる。戦争の音が。頭に響く。俺の名前は分からない。だけど、一部一部だけ記憶は残っているようだ。

「諦めは重要よ。あなたの判断はきつと間違っていない。……けれど、いいの？」

何が良いか何が悪いかと言うのか。

「良いんだ。どうせ、正義なんてモノは虐殺することと同類だ」

それは、何度も何度も考えたことだったはず。正義を成す者と虐殺をする者の違い。虐殺する者は自分の正義を以って虐殺するのだろう。ただの快樂殺人者を殺すことは正義なのだろう。生きてるだけで迷惑になる者を排除するのは、正義なのだろう。そんなことが、俺が望んでいた正義なのだろうか。

今となっては、分からない。

「諦めずに咲いた花は美しい。あなたは、美しくありたいと思わないの？」

「諦めずに咲いた花は美しい、か。ああ、確かにそうかもな。でも、泥にまみれて尚、道を進んでいけるような男じゃあなかった」

そう、泥と血に塗れたこの心に、もう進んでいく気力はない。

俺の進む道の先には、きっと何もない。あの、英雄と言われながらも正義を求め続けた男と同じように。

「じゃあ、違う道を進んでみない？」

「……………」

違う道。正義から外れる道？ 俺はそんな道を、正しく辿っているのだろうか。一度、道を外してしまった俺は、不安で仕様がなかった。

「もし、私が提示する道を進んでみる気があるなら、この手を取りなさい」

まるで不釣り合い。幼子の様な声なのに、大人びた口調。子供が背伸びをしているような。微笑ましいと思ってしまう。

そして、暗闇の向こうから、手が伸びた。ベッドの上に誰かが乗ったのが分かった。きつと、この幼子だろう。

俺は、無意識のうちに手を取っていた。

「ふふ、私が提示する道。進んでみる気はあるのね」

「まあ、な」

ベッドの上に乗ってるはずの幼子は、表情が見えない。ここに来て数分は立つだろうが、未だ、俺の目は暗順応していないようだ。

「そうね、まずひとつ。私の仕事を手伝いなさい。そしてもうひとつ。私の奴隷になりなさい。……この二つの中から選びなさい」

「それは、道と言えるのか？」

彼女は、少し考える素振りを見せてから答えた。

「そうね……。仕事をしているなかで自らの道を探しなさい。私が提示したのは道のヒントよ。ここに来たからには、普通に過ごすか、仕事をするか。そのどちらかしかない。結局のところ、『あの世』も『この世』も変わらないってことね。そして、普通に過ごしていてあなたの進むべき道を見いだせると思う？」

確かに、俺の進むべき道というのは普通の生活をしていては見つからないだろう。だが、仕事をしていて見つかるものなのだろうか。「安心しなさい。『この世』での仕事は、命に関わる仕事しかないから」

「つまり、普通じゃない、てことか」

「どうかしら……。この世では普通な仕事だから」

『あの世』での常識が『この世』で通用することはないのだろう。「それで？ 仕事というのは、何をさせられるんだ？」

「殆どは、退治ね。この世に蔓延る『悪魔』を殺す仕事。即ち、悪魔払い師。エクソシストとも言うわね」

「……なるほど、確かに、良い世界だ」

人を襲うのが人でないのがどれほど嬉しいことか。人の正義であろうと決めていた俺にとって、実に良い世界だった。

「どう？ 奴隷になる？ 仕事する？ そのどちらにしても、あなたは私のパートナーとさせてもらうけど」

「無論、奴隷になど成る気はないよ。仕事をしよう。君のパートナーというのも、楽しそうだ」

そうして、部屋に電気が点った。その部屋は、とても殺風景な部屋だった。黒い壁に赤黒いベッド。白い机しかない。そして、彼女は……いや、少女と言うべきだろう。少女は、本当に幼い姿をしていた。

「じゃ、早速仕事の契約でもしてきましようか」

そういう腰まで届く銀髪を靡かせる彼女の顔は、とても嬉しそうだった。

『この世』には、悪魔がいる。姿は人間の形をしていることが多い、人間の姿からかけ離れた者を魔物というらしい。

そして、『この世』での俺の力は健在のようだ。

俺が持つ力は投影魔術。かの英雄——正義の味方——の力を求め続けた結果、魔術回路が投影魔術にのみ特化していった。俺が見たことのある武器、宝具と呼ばれる代物、或いは、日用品まで確実に複製をさせて見せることができる。しかし、実のところこの魔術は魔術と言えない。まずひとつ。この魔術は、俺が使えるはずのない

魔術。だから、これは投影魔術によく似た別魔術。ただ、俺が投影魔術だと思い込んでいるだけ。故に、あの世界。あの、現実世界を心情世界で侵食するという禁忌は、使えない。そもそも俺が使う魔術と、かの英雄が使う魔術は似ているようで違う。

更に言ってしまうえば、本来、投影魔術というのはただの代用品。オリジナルには遠く及ばず、外見だけを真似る。しかし、あの英雄と同じく、俺も放っておけばいつまでも存在していられる。なにより、俺が作る武器はオリジナルと同じ能力を持つ。これはイメージの問題。イメージが強ければ強いほど、オリジナルを超える力を持つことさえできる。イメージが弱ければ、能力は愚か、外見さえも似ても似つかぬ物となる。

そういった説明をした。

「へえ……投影魔術に良く似た魔術ねえ。残念だけど、私はその『投影魔術』っていうの知らないわ。それに、かの英雄って誰よ」

「その前に、魔術という存在を知っているのだな。君は」

「ええ。この世界に住む人は魔術や、あなたが言った宝具。弱い所は普通の剣や普通の銃を使ってるわね。その魔術や宝具は、全てが悪魔退治に使われるわ」

今、俺がいる場所の説明をしよう。説明も必要ないかもしれないが。

実は、あの部屋からまだ一步も出ていない。まず、部屋を出る為の扉が見当たらない。壁は一面真っ黒。故に白い机がより目立つ。そして、今さっき気付いたのだが、天井には悪趣味としか言い様のない絵が描かれている。

「それで、君が言った悪魔払い師にはどうすれば成れるのかな？」
エクソシスト

少女は、ちょっと頬を膨らませ、不機嫌そうに言った。

「そんなに急がなくてもいいじゃない……。そんなに早く仕事をし

たいの？」

「ああ、それはそうだ。早く、正義という物を見つけないからな」

「……結局、諦めきれてないのね」

少女はため息交じりに言った。

そして、少女は驚くべき物を見せてくれた。

「なんだ……？ それは」

「ん？ 魔法の扉よ。……以外ね、もっと驚くかと思ったんだけど」
何を言うか。十分、いや、十二分に吃驚している。少女の指一振り、そこに突然、扉が現れたのだ。木製の……しかし、とても美しく飾られたそれは、始めからあったと言わんばかりの存在感を放ってきた。

「それじゃ、自己紹介しようか。私は……」

そこで少女の言葉が詰まった。

「私は、桐谷唯きりやゆい」

「へえ、意外だな。外見……銀髪からして、日本人ではないと思ったのだが……。まあいい。俺の名は……ああ、そうだった」

俺の名は、忘れてしまっていたのだった。

「ん？ どうしたの？」

「いや、なに。ちょっと、自分の名を忘れてしまっていてね……」
少女は、さっきとは対照的な悲しい表情を見せた。

「そう……やっぱり神様は酷いのね」

「……？ 神様？」

「ううん。なんでもないわ。それじゃあ、あなたの名前……呼び名を考えなきゃね」

俺の呼び名。正義に成ろうとして成れなかった、男。

「……正男?!」

「ふえ!？」

ダメだ。略したらどっかの犬みたいになったぞ……。くっ……。まさか、名を考えるだけでこんな苦しむことになるとは……。

「ま、正男って……どうしたの？」

「いや、なんでもない。ただのバカの発言だと思ってくれればいい」
しかし、本当にどうすればいいものか。自分の名前……。

「あの、さ。私が考えたんだけど、『桐谷』の姓を名乗らない？」

私のパートナーなんだし」

「ああ、別に構わないが」

「そっか、良かった♪」

屈託ない笑顔。本当に愛くるしいと思う。しかし、なんだろう。

出会ったときから感じてはいたが、ここに来て、変な違和感が……。

「あなたの名前は」

何故だか、その先は聞きたくなかった。

「桐谷士郎」

ドキン、と。心臓が一つ高く鳴った。シロウ、それは……あの英雄の名前。

「いや、ダメだ。それは……ちょっと」

まさか、あの英雄の名を貰うわけにはいくまい。

「……なんで？」

「バカにしない、と約束してくれるのなら、理由を話そう」

「いいわ、約束する」

「……俺の憧れた英雄と同じ名だから」

少女は、笑わず、バカにすることもなく、ただ、瞳を揺らした。

「……自分の名前は忘れてるくせに、そんなことは覚えているのね……。それほど、あなたの中のある英雄は大きな存在なの？ お兄ちゃん」

「……」

独り言を、言ったのだろう。だが、その言葉は俺の耳に入ってしまった。だが、待つてほしい。俺に、妹なんかいたか？ ダメだ。

妹だけじゃない。親も、友人も……覚えていない。まず、友人と呼べる友人はいたのか？ 家族はいたのか？

「……あ、ああ……」

頭が痛い。思い鉛をぶつけられた様な。鈍い痛み。突然の衝撃に、俺は倒れた。

あれから、幾ら時が過ぎたのだろう。俺が目を覚ますと、そこはあの居心地の悪い黒い部屋では無かった。

見ると、あの部屋とは対照的な白い壁。ベッドも純白。逆に、黒く染まった机が部屋の隅に置いてあった。そして、どうやらこの部屋には出口があるらしい。

本来、どこだか分からぬ場所で何か大きなアクションを起こすのは良くない。だが、俺は部屋を出た。部屋を出ると、普通の家の様だ。白い壁に、うすい茶色の板が敷き詰められた廊下。部屋が幾つかあるらしい。

少し歩くと、耳に何らかの音が聞こえた。水が絶え間なく落ちて行く音。雨の様な音。

更に歩くと、その音の発生源があると思われる部屋が見つかった。……皆さんはおわかりかもしれない。これから先、この部屋を開けると一体どんな状況が広がっているのか……。だが、頭が上手く廻らない今の俺には、想像すらできなかったのだった。

「……………む……………」

「……………え……………」

丁度、水の音が止んだ時に扉を開けてしまったのは不運だろうか。勿論のこと、ここは俗に言うシャワールーム。そして、それを使用しているのが誰かと言うと……。

「う……な、なんで……？　ねえなんで……？」

一糸まとわぬ姿を晒してしまった、唯。俺に見られたとあって、叫ばれるかと思ったが……。以外と冷静にシャワールームのカーテンを閉めた。その中から聞こえるのは、疑問の声。

これは、少しばかり一人にして置いた方がいいかもしれない……。そう思い、俺は先程俺がいた部屋に戻ることにした。

俺の部屋に唯が入ってきたのは一時間程が経過してからだった。

「や、ヤァ！ 体調はドウカナ!?」

「バッチリさあ！」

まあ、当然のごとく、最初はこんなきこちないやり取りが続いた。しかし、それも時間が経てばなんとかなった。勿論だが、ちよつとした気まずさは取り払われず、唯は目を合わせよとはしないが……。

「そういえば、エクソシストの仕事は……」

俺のこの一言で、やっと唯は目を合わせてくれた。

「ああ、そうだったわね。基本的、エクソシストは自由行動。ただ、朝の出勤的なものはしなくちゃいけないけど」

「いや、そうではなくて。エクソシストになる資格とか……そういうものは、ないのか？」

「資格なんてものは要らないわ。ただ、それなりの実力があればいいの」

実力。単純な手合わせなら、かなりの自身がある。だが、悪魔がどんな物なのか分からない……。

「その実力は、どのようにして測るんだ？」

「模擬戦よ」

模擬戦。つまるところの、練習試合だろうか。だが、一体だれと？

「相手はランダムよ。まあ、私が相手に成ることはないはずよ。模擬戦の登録上、私はあなたのパートナー……。所謂、サポーターね。分からないことは、何でも教えるし、最低限の支援をするわ」

そう言うと、唯は先程と同じように指一振りで扉を出現させた。

「もう登録はしてあるわ。さあ、行きましょう。正義に成ろうとしたあなたの力、見せてよね」

そういう唯は、ちよつと嬉しそつだつた。なにより、その笑顔は眩しくて……いつか儚く消えてしまふ光の様にも見えた。

死（後書き）

ということ、後書きです。どうも桜楼です。

いやあ……皆さん。F a t eを知ってる人なら分かるかもしれないま
せんね。

正義の味方になろうした英雄。無論、アーチャーこと、英霊エミ
ヤのことです。ただ、この世界観自体には、あまり関係のない感じ
……と言ったらアーチャーに失礼なんだろうなあ……。まあ、とり
あえず、二次創作じゃなくオリジナルということにしました。

さて、この物語はまず謎だらけです。男が死んだ理由。妹かもし
れない存在。悪魔という存在。

この謎は、物語を進めていくにつれて解けていくはずですよ。

俺の更新速度は、蛞蝓以下です。そんな作品でもいいという人は、
お気に入り登録とかしてくれると嬉しいです。

せめて、一ヶ月に一回は絶対に更新したいですねえ……。

エクソシスト試験

正義の味方に成ろうとした男は裏切られた。それでも、裏切った奴らを憎むことも、恨むことも、呪うこともしなかった。許容したのだ。

俺なら、どうしただろう。きっと憎んだ。きっと恨んだ。きっと、呪った。

あの英雄は、一体どのような心を以って、奴らを許容したのだろうか……。

俺には、理解の範疇を超えている疑問なのかもしれない。

エクソシスト試験

唯が開けた扉の向こうには、眩いばかりの光が見えた。それが唯の笑顔と相俟って、なんだか、唯自身が光の様に見えてしまった。呆気なく消えてしまう、光の様に。

扉を抜けると、その光の正体が分かった。魔法、だろう。

大きな音と共に扉を抜けた俺を歓迎したのは、光魔法だった。こんなことに魔法と同類である魔法マジックを使うとは……。

どうやら、エクソシストの本部らしい。内装は聖の一言を思い出してしまふ、大聖堂の様だった。

「おはようございます、桐谷部隊長！」

「ん、おはよ」

大きな声で挨拶をした男がいた。

その男は、薄い紫という不思議な色をした髪をしていた。メガネをかけて優等生染みたその顔は、見てるだけで嫌になった。

「そちらの男は……？」

男は、やっとなんという存在に気づいたらしい。

「ああ、私が推薦する新米エクソシストよ。これから模擬戦をしにいくの」

「そう、なんですか」

何故だか、男は俺の顔をじっと見ていた。む……まさか。

「まさか……貴様ホモか！」

「違うわああ！」

なんだ違うのか。驚かせよって。

「お前、部隊長って呼ばれてたな」

白い廊下を歩いているときに、ふと言ってみた。

「うん、私これでも悪魔討伐二番隊部隊長だから」

こんな幼い姿で部隊長とは……。

「悪魔討伐、というのは役割の様なものか？ エクソシストは例外なく悪魔を討伐するものではないのか？」

唯は、少しめんどくさそうに言った。

「エクソシストにだって、得意分野って言うのがあるでしょ？ 治療魔術が得意なら医療班。攻撃魔術が得意なら討伐班。索敵魔術、強化魔術、後衛魔術が得意ならサポーターね」

攻撃魔術と医療魔術は知っているが……。索敵魔術とは、なんなのだろうか。

「……正義の味方を目指したくせに魔術の知識もないの？　はあ、これだから……」

これだから、お兄ちゃんは、とても言おうとしたのだろうか。少し言葉がつまった。

「索敵魔術っていうのは、言ってしまえば気配を探る魔術ね。得意な人ほど、とても広い範囲で気配を感じ取ることができるから、巨大な悪魔の組織を潰しに行くときに必須な魔術よ」

そのような説明をされている間に、大きな扉の前に着いた。

とても大きなそれは、なるほど。悪魔とは対する聖のような彫が施されている。これだけ大きな扉なのだ。中にいるのはきつと、エクソシストのお偉いさんなのだろう。

「失礼します」

ノックを二回してから、唯は扉を開けた。

そして、絶句。

なんという部屋なのだろう。いや、最早部屋と言っているのかすら分からない。天井は高く、部屋の総合面積は一キロメートルを超えているかもしれない。

部屋の中央を良く見ると、人がいるのが分かった。紺色の髪。愛想のない無表情で立っている男。

「あれ、クロキ副隊長……？　なんでここに？」

唯は首を傾げ、その男の名を言った。クロキという男は、話すのが面倒だと言わんばかりに無言。一言も言葉を発しない。

「彼が、模擬戦の相手ということじゃよ。桐谷二番隊部長」
しわがれた声が後ろから聞こえた。振り向くと、声と釣り合う外

見。言ってしまったえば、ご老人がそこに立っていた。長い白髪と髭を生やし、木製の杖を持っている。更に服は白いローブの様な物を着ている。魔法使いのイメージに当てはまる。

「そ、そんな！ 彼は一番隊の副長ですよ！？ 手合わせをするには、ハードルが高すぎます！」

「じゃがなあ……ほれ、模擬戦の相手はランダム。決まってしまうえば、変更は不可じゃ」

唯は、そんな……と声を漏らした。

クロキは、真っ直ぐに俺を見据えている。なにか細工をされている感覚は無い。ただ見てるだけ、か。

「大丈夫だよ、唯。あの男に勝てば、俺の实力は認められるのだから？ 簡単な話さ」

唯は、いきなり俺の方を振り向き、怒る様に言った。

「何を言ってるの！ あれは悪魔討伐班の中でトップクラスの人のよ！？」

唯のその言葉を背に、俺は進んだ。

——トレース
——投影、開始、オン

全工程、完了。魔力による物質の固定化。完了。

俺の愛用する剣。「暗闇を払うもの——ダークリパルサー——」。

美しく華奢な外見にそぐわぬ切れ味と重さを持つ剣を右手に持つ。

もうひとつ。「約束された勝利の剣——エクスカリバー——」。

片手で振るうには、少し重く大きいそれを、確かに左手に納める。

エクスカリバー。アーサー王が使った愛剣。その力は、光の聖剣の名に相応しい眩く圧縮された魔力を光のエネルギーに変換して放出させる。

ダークリパルサー。単独行動が目立つ剣士が持った剣。右手に「エリュシデータ」と言う黒い剣を持ち、左手に「ダークリパルサー」を持っていたという。未だ、俺はエリュシデータを見たことがない。故に、投影もできない。

強くイメージをすればできるかもしれないが……架空の剣を出す難しさ。外見の特徴を自分で作り、物質化する困難さ。それを見れば、自分の見たことのない武器を投影しないのは、極当たり前のことだろう？

後ろを振り向くと、唯が驚愕の表情をしていた。

「そんな魔術、私は知らない……」

ある意味これは、オリジナルの魔術と言っているのだろう。英雄がいた世界と、俺がいた世界では、魔術が根本的に違う。故に、俺が作った魔術。大気に満ちる魔力を凝縮させ、物質化させる。魔力の消費量は、作りだす武器によって異なる。

さて、気を取り直してあのクロキとか言う男を見据えましょう。今のところ、武器らしい武器は持っていない。

「では、始めるとしよう。両者、武器を構えろ」

老人の掛け声とともに、相手が動いた。

相手は、なにやら呟いている模様。……詠唱。なら、話は早い。

「はああっ！」

俺は足に魔力を貯め、できる限り早く相手に近づこうとする。詠唱をしたと言うことは、なんらかの魔術をするということ。な

ら、詠唱を邪魔すればいい。

だが、少しばかり出遅れたようだった。

「滅びの歌を共に謡おう ガラディーン」

一段大きく聞こえた言葉と共に、そこに大剣が現れた。クロキはすぐに両手で柄を持ち、俺と対峙した。

甲高い、鉄が交わる音がした。俺のダークリパルサーは、ガラディーンと相性が悪いらしい。相手の剣の重さを生かした斬撃は、華奢なダークリパルサーには、耐えきれん。

すぐに、力を入れ、クロキの剣を振り払った。

しかし、クロキは着地した瞬間に瞬間移動とも言える速度で俺の懷に飛び込んできた。俺はそれを左に持つエクスカリバーで防ぐ。

「くっ……！」

交差する刀身。

舞い散る火花。

「この程度か？」

クロキが喋った。剣を交えながら。

俺のエクスカリバーはとても脆い。丈夫さを欠くことで、魔力消費量を少なくしている。しかし、そうも言ってられなくなってきた。

強化、開始。

エクスカリバーに罅^{ひび}が入る前に強化を施す。更に、刀身へ魔力を集中。

そして、先程の様に、相手の剣を一方的に振り払う。

「約束^{エクス}された……」

ダークリパルサーを捨て、両手で大振りにエクスカリバーを構える。

「……！」

クロキも、なにか大きな技が来ると悟ったのだろう。さっきまでの攻めを止め、防御の姿勢に入った。

だが、その程度の防御で、エクスカリバーが防ぎきれんと思うなよ？

「勝利の剣——！！！！！」

構えた剣を、床を裂く勢いで振り下ろす。そして、視界は一面の光に満たされ、視力を一瞬失った。

「がっ……ぐう……！！！」

ガラディーンでの防御は、やはり無理があったらしい。先程の場所から数メートル吹き飛んでしまっていた。

俺は、エクスカリバーを解除する。

「もう、退いてくれないか？」

「……なに？」

クロキは納得がいけないと言う様に低く、唸った。

「無駄な殺生は、好きじゃないんだ」

「ふざけるな」

ガラディーンを杖代わりに立ちあがった。すごい気力だ。

「ふむ……仕方ない、か」

——投影、開始。

英雄が愛用した二刀一対、陰陽の夫婦剣「干将・莫耶」を作り出す。

クロキは、諦め悪く立ち向かってきた。両手で構えたそれを、振りかざしながら。

「あああああああああああああ！」

「ふん！！！」

干将・莫耶を投げる。二刀は、引き合う様な形で……更に表現す

るならブーメランの様に飛んだ。

一度、相手の横を通り抜け、後ろからの攻撃……だと、思うだろう。

しかし、それはクロキの体を貫かなかった。

「終わりだ。クロキ」

そう、終わり。

「まあ、殺しはせん」

俺の手に、もう一度握られる干将・莫耶。

「精々、頑張って防ぎたまえ」

莫耶を、投擲した。

その莫耶を防ごうと、クロキは防御の姿勢に再び入る。

そして、莫耶がクロキの剣にぶつかった瞬間。

「壊れた幻想——ブローケン・ファンタズム——」

莫耶が弾けた。大きな魔力の奔流が生まれる。

「ぐあああ——!!」

クロキの短い悲鳴が聞こえた。

「どうかな。これで、俺の実力は分かったはずだが……む、どうした？」

クロキが医療班に運ばれていった後、俺は老人に話しかけた……のだが、返事がない。ただ、両目を見開いていた。その場の状況が飲み込めない。理解出来ないと言った表情だった。

「ご老人？」

「あ、いや。すまん。少々、幻覚を見たのかと……。我が目を疑ってしまったよ」

そう言うや否や、老人は背を向けた。

「うむ……拒否する理由が見当たらん。これよりお主を、エクソシストの一員として認めよう」

どうやら、合格らしい。ふむ、それは良かった。と、唯の方を振り向くと、なんか耳を劈く様な声がした。

「なんで！？　ねえなんで！？　今のが投影魔術ってヤツなの！？　あり得ない。魔力を物質化させるなんて……イレギュラーよ！　そもそも、一番隊副部隊長を倒すこと自体――」

「まあまあ、良いではないか」

その場を収めてくれたのはご老人だった。

「わしも、まさかクロキを倒すほどとは思わなかった。せめて三分。クロキの攻撃を凌げていれば合格にしてやろうと思っていたしな。じゃが、この男の実力はクロキを上回った。なにより、わし等の使えぬ魔術を使える。これが分かれば十分、エクソシストになる資格は得たも同然。更に言ってしまうえば、魔力の物質化はイレギュラーではなからう。魔力からエネルギーを出し、そのエネルギーを物質化・固体化させる魔術は少なからずある。そのエネルギーにすると、いう工程を抜かした魔術。ただ、それだけのことでじやろう？」

ご老人の説明は、俺でも驚くほどの正確さを持っていた。確かに言われてみれば、エネルギーから物質化するという魔術は存在する。俺も、幾らか見てきた記憶がある。何故自分の名だけ忘れてしまっているのか……なにか、覚えていてはいけないことだったのだろうか。

「当分は、私の家の部屋を使わせてあげる」
唯はそう言った。

俺の宿泊する場所がない。故に、自然とこういう形となった。エクソシストの本部と言える場所には、仮眠室はあるが公共の場所なので借りるわけにはいかない。

「すまないな。まあ、家事の手伝いくらいはさせてもらおう」

「いいわよ、だって……ほら、居候なんだし」

「ふむ……まあ、俺の好きな様にさせてもらおうよ」

「ええ、どうぞ」

ということで、まずは寝ることにした。先程、エクスカリバーの力を使ったからだろうか。神経を擦り減らしてしまった様だ。先程から、とてもない眠気に襲われている。

少し、これからのことを考えながら、安らかな眠りにつかせてもらおうじゃないか。

俺が目を覚ましたのは、なんと午後六時頃だった。

今更だが、部屋に窓があることに気付いた。

そこに広がる光景に、少し驚いた。

大都会。ビルが立ち並び、車まで走っている。人は、とても多い。生前の都会と何一つ変わらぬ光景。

「……ここは、本当に死後の世界なのか？」

「ええ、そうよ。死んだ人が集まる場所。生前の世界と何ら変わら

ない光景が広がる世界。高層ビルが立ち並ぶ都会から、田んぼが広がる田舎まであります」

後ろから声がした。無論、部屋に入ってきた唯だった。

「ここは、命の掛かった仕事しかないのでは？」

「ああ、あれは過剰な演出を私がしただけ。魔術を扱えない人は普通に仕事をして、生前となら変わらない生活をしている……。あ、それと、死後の世界とは言えお腹とかは減るからね」

なるほど……。確かに、久しぶりに感じる空腹感があった。

「……ああ、そういうことか。もう晩飯ができたから俺を呼びに来た、という理解でいいのか？」

「ええ、大方そんなところよ」

しかし、今更だがとても背が低い……。俺の妹にしちゃあ、若すぎないか？ 実際は俺はもう三十歳を超えていたはずだが……。

そういえば、少しばかり俺の目線が下がった気もする。これまで忙しいことこの上なかったからな。こういうことには気づかなかったのだろう。

まあ、そんなに困ることもないだろうから別にいいが。

「じゃ、ご飯食べよ、お兄ちゃん！」

そう言ってしまったから、唯は口を押さえた。もう遅いと言うのに……。

「今のは、聞かなかったことにしておいてあげよう」

「う、うん。そうしてくれると助かるわ」

きっと、生前に兄と言う存在がいたのだろう。それと俺を重ねてしまっているのだ。ちょっと、悲しい話だと思った。

それから、晩飯を食べた。何故か、ラーメン。しかも、カップ麺。「……何故だ」

「料理とか、できないから……」
目を逸らしながら、唯は言った。

「……はあ……」

「な、なによ」

「いや、今度からは俺が料理を作ろう。或いは、料理を教えてやろう。いいな？ カップ麺だとか、そういう物ばかり食べていたら健康に悪いぞ」

そんな訳で、早速、俺が手伝うべき家事が一つできたのだった。

エクソシスト試験（後書き）

後書き的な何か。

あー疲れた。極限に疲れた。もう寝る。

（既に後書きじゃない気がする？　きっと気のせいだ）

ところで、この話に出てくる魔術について説明をしておきましょう。

魔術とは、術者自らの体内にある魔力を使う者と、大気中に広がる魔力（マナ？）を使う者がいます。

主人公（そういえば名前まだ決まっていな……）の投影魔術に良く似た魔術は、大気中にある魔力を凝縮させ、形を想定。そこから、一気に固体化、物質化をするわけですね。

基本的には、魔力を物質化させるときは目に見えないエネルギー体（魔力）から、目に見えるエネルギー体へと変えてからだが、主人公はその目に見えるエネルギー体にするという工程をぶっ飛ばして物質化させてるわけですね。

ちなみに、目に見えるエネルギー体とは、所謂属性。「火、風、水（氷）、電気、光」などです。これらは、術者の素質によって異なる。風が得意なら、魔力を放出すると突風が吹き出る。火が得意なら、火炎が噴き出る。水が得意なら、水が漏れ出る。電気が得意なら、雷を発生させる。

そして、その目に見えるエネルギーから、炎の剣や、風の剣として、エネルギーで固められた刀身を作りだす。

更に言うと、主人公は物質化した後、その宝具の性質によって全ての属性を扱えるともいえる（エクスカリバーなら光等々）。

物質化してからエネルギーを出すと言う、逆転した魔術なのだ。ちなみに、大気にある魔力を使うと言っても、それを凝縮させる

ために少しばかり魔力を消費する。消費量は武器の大きさや、能力によって異なる。

ついでについでに、何故干将・莫耶を投げておいて相手を貫かなかったのか。

これは、大気にある魔力をなるべく集める様になっていると解釈してください。一方的に魔力を凝縮するのではなく、大気にある魔力を拾い集める。

「ブローケン・ファンタズム」は魔力の爆発みたいなものですかね（多分）。できるだけ魔力を集めれば集めるほど威力があがるかなーなんていう、俺の身勝手な想像ですはい。

ちなみに、俺はF a t eにあまり詳しくありません。アニメで見たくらいです。劇場版で見たくらいです。ゲームは、士郎と我様の決着のシーンしか見たことはありません。あ、でもP S 2版のアンリミテッドコード（?）は持ってます。でもコンボとか分かんないから放置プレイ中です。

英雄の夢

燃え盛る炎。崩れたビル。所々に破壊されたような跡が残る地面。そして、血と死臭。

ある大災害。坂城市大災害。謎の巨大な爆発。原因は数年経って尚、明かされることはなかった。その大災害の数少ない生き残り。それが、俺だった。

赤い服と鎧の様な物を着た男に助けられた。

「名は、なんと言う？」

「士郎……桐谷、士郎」

そう答えると、その男は大層驚いたようだった。

「ほう、私と同じ名か。私はエミヤシロウ。君を、助けにきた。向こうで、君の妹が待っている」

そう言うのと、俺を背負ってくれた。そして、妹の場所へ届けてくれた。

英雄の夢

男は、エミヤシロウと名乗った。シロウの背中はとても大きかった。まるで、いろんな物を背負っているような背中。でも、酷く疲れている様にも思えた。

そして、俺を妹の場所へ連れて行ってくれた。

瓦礫が山積みになっている町が一望できる丘に避難させてくれた。

「では、私はもう行くとしよう」

「ま、待って！ エミヤさんと、もうちょっと話をしたい！」

「……まだ、生存者がいるかもしれない。それを確認したら、話を
してやろう」

「ホント？」

「ああ、約束だ」

そう言って、エミヤシロウは背中を向けて去ってしまった。

エミヤシロウは帰ってきた。その背中には何も背負われていない。
当時十二歳の俺は、悟った。

——他の生存者はいなかったんだ。

少し、泣きそうになった。けど、涙は堪えた。親もいなくなった。
そんな時に、四歳の妹の前で泣くわけにはいかなかった。

「エミヤさんは、正義の味方みたいだね」

「……………」

エミヤシロウは何も答えなかった。

「エミヤさんはなんでここに？」

そんな問いかけに、やっとエミヤシロウは口を開いた。

「私が……いや、俺が遭遇したことのある冬木大災害というものに、
状況が酷似していてね。助けなくては、という強迫観念に突き動か
されただけさ」

「……そっか。助けてくれてありがとね、エミヤさん」

できるだけの笑顔でエミヤシロウに応えた。

それから、エミヤシロウはいろいろ話してくれた。

英雄の話。正義の味方に成ろうとした自分の話。他にもいろいろ
な話を聞かせてくれた。なによりも表情を深めて話をしたのは、自
分を助けてくれた衛宮切嗣の話だった。

エミヤシロウは話終わるとすぐに「まだまだ助けるべき人は沢山
いる。……君は、私の様になるなよ」と言って、去っていった。そ
の後ろ姿はちょっとカッコいいと感じた。

目が覚めた。時計を見ると、既に午前の六時。五時に起きる俺としては、随分な寝坊だった。

懐かしい、夢を見ていた気がする。妹という存在。まさか、本当に……？

いや、妹とは八歳しか変わらない。あんな小学生染みた姿な筈がない。

「さて、朝ごはんの用意でも、するとするかな」

独り言をつぶやいた。そして黒い寝巻きから、昨日唯が買ってくれた黒いスーツに着替えをした。今日から、エクソシストとして働くこととなる。

今日から初仕事だと思うと、少しばかり緊張する。

「……らしくないな」

緊張なんて、本当、俺らしくもない。いつもの飄々とした態度でいるべきだ。頬を二回、力強く叩いて部屋を後にしようとした。

その時、部屋の出口付近に鏡があることに気付いた。折角だから、有効活用させてもらおう。身支度を整えようと、鏡を覗き込む。

「なっ……!!？」

そこには、写ったのは自分なのか？

三十歳を超えてから目立ってきたおっさんらしさは欠片もない。まるで、高校時代に時間が巻き戻ったかのような肌。そして、白い、髪。

白い髪は、強ち嫌いではない。あの英雄も白い髪をしていたからだ。だが、自分がそれになってしまおうと言うのは、どうなんだ？

とりあえず、冷静になって朝ごはんを作ろうと部屋を後にした。

朝ごはんは白米に目玉焼き。ウィンナーを数本焼いて、キャベツを半分千切りにした。そして、ネギの味噌汁。これが、俺の朝ごはんスタイル。

そして、俺の向かい側に座る幼い容姿を持つ少女。唯は、大きな欠伸をしながら目玉焼きを一口、口に放り込んだ。

「……！？　な、なに。この美味しさ……！　見た目はただの目玉焼きなのに……」

ふむ、どうやら、ご満悦の様だ。一口放り込んでは良く噛み、また放りこむ。最近の若者は、ご飯を食べるとき、噛まないらしいが……それは、ある意味、料理に問題があるのではないかと思っている。

噛めば噛むほど美味しさが口いっぱいに広がる料理。

それが、料理人としての俺が求めた物だった。

そうそう、俺は紛争地などに住む人々にはこう呼ばれていた。『神の手を持つ料理人』。そこに食材と調味料があれば、どんな物でも美味しい物に変えてしまう魔法の手。まあ、ただ単に妹を養っていた数年間で料理の腕が上がっただけなのだが。

そこで、また思い出す。

妹という存在。

この少女は銀髪だ。俺の妹は黒いロングだったはず。だがしかし、生前黒い髪をしていた俺の髪が白くなっている。

理由は不明だ。唯曰く、「稀に、身体の一部が変わってたり、若返って送られてきちゃう人とかいるらしいから、気にしなくていいんじゃない？」ということだった。

そして、朝ごはんを食べ終わるとすぐにエクソシストの本部へ行くこととなった。慌てることは無い。唯の指一振りで、あの扉が現

れるのだから。と、思っていた。

「さ、行きましょう、士郎」

唯は、俺のことを士郎と呼ぶようになっていた。昨日見た夢で、これが本名だと知ったからだろうか、抵抗はなかった。だが、俺の本名を知っていると言うことはやはり唯は……。

さて、そんなことはもうどうでもいいこととしよう。

「……扉は、出さないのか？」

「あれって結構な魔力を消費するのよねえ」

ということ、徒歩での通勤となった。

「一体、どこまで歩く気だ？」

歩き始めてから一時間。俺は、森の中を彷徨っていた。

「もうすぐよ。もうすぐ……」

先程から、答えはこればかり。

朝の運動にはもってこいだが……、さすがの俺でも、これは少しばかりキツイ。

「あ、あれよあれ！ よかったあ、見つかって」

前をよく見ると、木々が切り開かれている場所に教会の様な建造物が見えた。だが……、

「……迷っていたのか……」

どうやら、迷子になっていたらしい。

「え！？ い、いや！ そうじゃなくてね！ ほら、えと……」

「はあ……言い訳は後で聞かせてもらおう。今は急いで朝のお勤めとやらをするべきなんじゃないのか？」

「そ、そうね。そうしましょう」

唯を先頭にして、俺は教会に入った。

教会に入ると、中も普通の教会だった。どうやら、本部自体は地下のようだ。

「よいしょつと……さあ、ここを進めばエクソシスト本部よ」

マリア像を退かした下には階段があった。やはり、地下なのか。

「朝のお勤め、ご苦労様です。桐谷二番隊部隊長。……珍しいですね、いつもは『昼のお勤め』になってしまうのに」

「えーつと、まあ、今日はパートナーがいるからね」

メガネをかけたクールな少女に、唯はある紙を渡した。

「その紙は、なんだ？」

「ん？ ああ、これ？ これは部隊長だけが持つ紙でね。昨日の報告書みたいなものよ」

その紙は、おそらく俺のことも書かれているのだろう。なんて書かれたのか気になったが、部隊長以外は見ちゃだめ、とのことだそうで……。

「はい。それでは報告、お疲れまでした」

紙と睨めっこをしながら、唯と書かれた内容について確認をしていたメガネ少女だったが、どうやらもう終わったようだ。内容を聞いていたが、やはり俺の情報も一部書かれているようだった。まあ、情報が漏れて困ることもないからいいのだが。

そして、次の行動が大変だった。

エクソシストとしての任務をやるか、俺の日常生活に必要な物を買いにいくか。選択肢はこの二つだった。

俺としては、買い物に行きたかったのだが（何せ、唯の家には賞味期限の切れた食べ物ばかりで食材にならない）……。唯は、早く

エクソシストの仕事を俺にやらせたいらしく、任務に行こうと言ってきた。

「まあ、簡単な任務をやって買い物にいいかい」というのが、俺の最終的な結論だった。

唯が選んだ任務は簡単なものだった。

『低級悪魔集会の調査』

『任務内容…低級悪魔が集まっている場所がある。その場の詳しい調査、及び、悪魔が集まっている理由を暴いてほしい。更に、低級悪魔とは言え、どのような能力を持っているのか等の詳細も欲しい。』

場所 ； 菊川廃墟ビル全体。

ノルマ .. (一) 場所の詳しい調査。 (二) 悪魔の詳細。 (三) 最悪の場合、悪魔の殺害。

報酬 .. (一)、 (二) をクリアー―「三万〓六万 (※情報量によって)」。

.. (三) の場合―「三万〓五万 (※) (殺した悪魔の量によって)」。

『』
というものだった。

最悪の場合は殺す、か。一体、どういふ場合だろうか。

「それじゃ、早速行きましょう。廃墟ビルの場所は私の住んでる町だから、すぐに見つかるはずよ」

……まあいいか。唯についていくことにしよう。

「で？ その菊川廃墟ビルはどこなのかね？」

「う、うー……。えっとお……」

正直に言おう。迷った。まず森の中から出た瞬間、明らかに来たところと違う光景だった。

田舎だったのだ。田が広がり、木造建築が立ち並ぶ。村の様な場所。久しぶりの田舎の空気はとても旨い。しかし、良く見ると俺達が出てきた場所の正反対に大きなビルが立ち並んでいるのが見えた。これでも視力には自信があるのだ。

そんなことを言っている場合ではないな。

時間にして正午だろう。この空腹具合からして間違いない。そして悪魔の集会の時間は午後一時。せめて三十分で森を横切り、残り三十分で菊川廃墟ビルを探す。とてつもなく面倒だ。集会に間に合うかすら分らないし。

「ああ、やはり君に任せた俺がバカだったのだな。君が責任を感じる必要はないよ、唯」

「バカにしてるのか慰めてるのか、どっちなのよ……」

無論、どっちもだ。

しかし、これほどの方向音痴。良く任務を遂行してきたものだ。

そんな心の声が聞こえたのか、唯はこちらをキツという感じに睨んできた。

「私が方向音痴なの知っててついてきたのはどこの誰よ？」

「生憎、君が方向音痴だとは知らなかったが？」

「気付きなさいよ！ 今日、本部いくとき迷ってたでしょ！？」

「いや、偶々かと思っただけ……。いや、今はそんなことはどうでもいい。さあ、さっさと廃墟ビルを目指そう。……ちよつと、邪魔するよ」

「ひゃあ！」

情けない悲鳴。理由は、俗に言うお姫様抱っこをされたからだだろう。

これから最高でも三十分で向こう側に抜けなくてはいけないのだ。のんびり歩いていく訳にもいくまい。

足に魔術による強化を施し、脚力アップ。

「では、行くでしょうか」

「は、はい」

俺の胸の中で顔を赤くしているが……まあ、問題ないだろう。さっさとジャンプをする。木々を足場として、申し分ないだろう速度で進んでいった。

「き、気持ち悪い……」

「すまん、少し速度をあげすぎたな……」

背中を撫でてやる。とりあえず、三十分はかかるだろうと思っていた森をなんとか数分で横断できた。そして、ここからが問題である。菊川廃墟ビルを探さなくてはいけない。

「菊川廃墟ビルの外見的特徴は？」

「うーん、ただの廃墟ビルとしか言いようがないわよ……。まあ、結構高いビルよ。上の方には『菊川』って書いてある看板があったはずだし、案外簡単に見つか「そうか、じゃあ、アレだな」……あれね」

ホントに簡単に見つかった。

そもそも、森から出た場所が廃墟ビルの群だったのだ。不幸中の幸いと言うヤツだろう。その群の一つに、『菊川』と書かれた看板

を掲げているビルが見つかった。

まだ気持ち悪いだろう唯を背負ってやり、そのビルに向かった。

確かに、外見的特徴は看板くらいだ。普通の廃墟ビル。窓が割れて散乱していて危なっかしいことこの上ない。

「さて、悪魔はどこら辺に集まっているのだろうか」

残念だが索敵魔術などと言うモノを持ち合わせていない俺には、どこに悪魔がいるのかなどが分からない。

「おい、唯……って、寝てしまっているではないか……」

後ろを見ると、唯は規則正しい寝息を立てて寝てしまっていた。

「起きろ、唯」

揺さぶってみるが「うにゃ〜」などと唸るだけ。起きる気配は全くない。なにより……。

「……この寝顔を見ると、起こすのも可哀そうに思えてくるな……」

何気にまつ毛が長いとか、顔が整っているとか。ちょっとした観察をしていたら、瞼が開いた。

「起きたか、唯？」

「ん、あれ？　寝ちゃった……？」

「ああ、ぐっすりな」

「あう……ごめん」

「いや、気にすることはない。ほら、そんなことより目的地についたぞ。悪魔は何階にいるんだ？」

唯は、仕事モードにでも入っただろうか……さっきまでの眠そうな目から、真剣な目つきになった。

「……どうやら、探す必要はないみたいね」

それは、どういう意味だ？

そう問おうと思ったが、聞く必要もなかった。直感が告げる。罫

まれている、と。

「なんだ？ 悪魔と言うのは、姿を隠すことができるのか？」

「ええ、でも、姿を隠すことができる悪魔は限られる……。まあ、低級中の低級しかないけど」

それを聞きながら、魔術を発動。

――トレース 投影、開始。オン

『アーヴァイン 幻銃』。

魂の鎖で繋がれた二匹の獣が宿ると言われる銃。本来、銃なんていう複雑な物を作り出すことはない。だが、これは『撃つ』という意識があれば勝手に弾丸がセットされ引き金を引くと、弾丸は魔弾となる。つまり、撃つという概念武装。と言っても、中身は実銃と変わらぬが。

ただ、マガジンを交換する必要がない。先程言ったように、弾丸は撃ち手の意識で作られる。

ちなみに、追尾型の弾丸を行使しようとしたことがあったが、あまりの魔力の消費に一発撃っただけで意識を失った。弾丸は魔力の塊、とても言うっておこう。それが、一番簡単な表現だ。

形は二丁拳銃。魂の鎖、というのは、二丁を繋ぐコードのことだろう。伸び縮みは自由自在。このコードを使って、相手を拘束することだってできる。が、そんなもの使うなら『神の縛』という宝具を使う方がいいだろう。

神秘的な物を束縛する魔法の紐。生物……「命」自体神秘的なものだ。故に、命ある者が逃れることはできない紐ということになる。

さて、話がずれてきた。

とりあえず俺達が取るべき行動は、悪魔の分析だろう。

分析は唯に任せるとしよう。

「ところで唯。悪魔とは、人間と同じ知能を持ち合わせているのかね？」

「え？ うーん、まあ、大体そうね。まあ、会話くらいならできるんじゃないかしら。人間よりは明らかに思考速度とか知能は低いけど、それは低級悪魔限定ね。上級悪魔は何百年と生きれるから、人間よりも知能が高いのよ」

「そうか。……悪魔は隠し事、或いは、相手を騙すなどの行為はするのか？」

「さっきから何よ……。まあ、低級悪魔は人間を騙してよく遊んでるけど……」

「そうか、じゃあ、ちょっと交渉してみよう」

「は！？」

「悪魔諸君、少し交渉したいことがあるのだが……この提案を提示している間に、君達に危害は加えない。どうだ？ 俺にとっても、君らにとっても悪くない条件だと思うがね」

一歩踏み出して、そう言った。すると、意外と素直に悪魔たちは姿を現した。

なんという皮肉なことだろう。

悪魔とは、どういうものだ？

こんな、人間とまるで変わらぬ姿を……しているのか？

確かに、唯に言われたことがあった。悪魔は人間となんら変わらない姿をしていると。

これでは、前までの世界と変わらないのではないのか？

また俺は、人を殺し、正義となるのか？

「惑わされないで、人間の姿をしてても、悪魔は悪魔。人間を脅かす存在」

「そうか……それを聞いてちょっと安心したよ」

そして、もう一步踏み出る。

悪魔のリーダー核だろうか。スーツを着て、メガネをかけたサラリーマン風な悪魔。その悪魔だけ、魔力の量他の悪魔と比べ物にならない。……悪魔も魔術を使うということか？

「まず、姿を現してくれたことに感謝しよう。それで。交渉事だが……君達悪魔とは、なるべく戦いたくなくてね。どうだね？　ここに集まって何をしているのか教えてくれればいいのだが」

「残念だが、それは無理だな。私たち悪魔は、あなたたちエクソシストを倒す為の策を練るために集まっている」「そうか、それが聞けただけで十分だ」……なに？」

俺は右手に持った銃を構える。

「お前たちはエクソシストを潰す気なのだろ？　なら、敵対するに

は十分な理由だ。なによりこちらのノルマは、君達がなんのために集まっているのかを知るためだね……最悪、殺してもいいと許可が出ている」

悪魔は、してやられたか、と言っている。いやいや、知能が低い悪魔で助かったよ。

そして、戦闘の幕開けだ。唯はサポーターとして、俺の背中を守ってくれている。こちらは銃だから、単独行動でも十分なのだがね。銃声は、実銃と変わらない渴いた音。空になった高温の薬莖も出てくる。

威力は普通の銃とは比べ物にならないが、見た目や動作は普通の銃となんら変わらない。

そして、銃声が三十発程響いたことだろうか。突然、巨大な魔力を感じた。

後ろでサポートをしてきている唯は、ナイフを持っていた。そのナイフで飛びかかってきた一体の悪魔を切り裂いた後、唯も巨大な魔力がある方向を見た。

「なによ、これ……」

これほどの魔力を持つ物に会うのはいつ以来だろうか。

「貴様等、よくも我が部下達を殺してくれたな」

その声は、低く、厚く、轟く様に。確かに、耳に聞こえた。

「部下、ということはこれ等の親玉と見ていいのかね？」

俺の問いに答える必要はないと言わんばかりに無言で近づいてくる魔力の塊。見ている方向には何もない。姿を消しているのか？

そして突然、魔力の塊が瞬間的な移動をした。その移動をした場所……。

「――上か！」

空を見ると、大きな影で太陽の光が遮られていた。そして、それ

は降ってくる。

地面を轟かす様に着地。外見はただの老人。だが、身体に残る傷や、大きな斧を軽々と片手で持つてることから、かなりの強者だと判断できる。

俺は、その老人に向かって弾丸を一発、躊躇なく撃った。

「ッハ！ その程度の弾で我をなんとかできるとでも思っていたのか？ 小童が」

「いやいや、予想通りでなによりだ。簡単に死なれちゃ、こちらも殺り甲斐がない」

相手は防いだ。かなりの威力を持った弾丸を。片手に持った斧の一振りで、正確な斬撃。斧で防ぐとは思っていたが、まさか、斬ってくるとは思いもなかった。まあ、斬撃と言うより打撃の様な感じだが。

ふと、唯を見る。

唯は、怯える様な眼で俺とあの悪魔を見ていた。……いやなに、少し懐かしい目だ。味方からも怯えられる存在だった俺にとって、その手の目には慣れていたはずなのだが……。

そんなことはどうでもいい。今大事なのは、唯の目等ではない。この悪魔の戦闘能力だ。

試しに、干将・莫耶を投影、そして投擲。

「ふんぬ！」

左右からの攻撃に対し、回転するような動きと共に放たれた斬撃。無論、干将・莫耶は即座に魔力の粒子となった。

ふむ、どうしたものか。

実のところ、あまり良くない状況だ。
俺の武器は、とてつもなく脆い。

……仕方ないな。不本意だが、早々に片付けさせてもらう。

——イメージしろ。巨大な斧剣。英雄ヘラクレスが持ったとされる、
巨大な岩の剣。

——投影、開始。

目を閉じ、集中する。

目を開ける。両手には、イメージ通りのモノがあった。

『ナインライブス
射殺す百頭』

相手や状況に応じ形を変えるらしい宝具。だが、俺の魔術では形
が固定されてしまう。完全な複製は不可能、ということだろう。

あの悪魔の持つ斧に拮抗するには、これが一番だと、魔術回路を
伝い脳に伝達された。それは、ただの錯覚だろう。魔術回路が意思
を持っている等、聞いたことがない。

そして、俺は構える。少し……いや、かなり重い。腕を強化すれ

ばなんとかなるだろうか。これまでも、そうしてきた。なら、強化するのが常識か。

——強化、開始。

——強化、完了。

腕と共に強化しておいた足を使い、跳躍する。斧剣が持つて重さと重力の重なった一撃はとてつもないものだった。

「ぬう……重いな」

悪魔にそう言わせるほど。事実、悪魔の足は地面にめり込んでいる。

だが、すぐに振り払われた。

「くっ……」

砂埃が目痛い。まさか、あれほど簡単に振り払われるとは、な。

ならば、と思い浮かんだことがある。試してみる価値は、ある。

元より強化していた足に更なる強化。そして更に強化。ここまで強化していると、解除した後、嫌な違和感に付き合わされるが……まあ、問題あるまい。

そして、二度目の跳躍。勿論、かなりの強化を施された足のおかげで、先ほどよりも高く跳ぶことができた。

「ふう……芸がないのう」

悪魔は、さっきと同じ斬撃が来ると予想したのだろう。足に力を入れ斧を構えた。

腕に、足と同じくらいの強化を施す。

「……あああああああ！」

そして、投擲した。あの、巨大な斧剣を。

「なにい!？」

悪魔も、まさかこれほどの巨大な斧剣を投げるとは思っていなかったのだろう。しかし、冷静だ。すぐに足の踏ん張りを強めたのが分かった。だがしかし、物理的な破壊力は、先程の斬撃の二倍はあるだろう。それほどの破壊力を、抑えきれるとは思えない。

だが、受け止めた。

「ぬう……ううううう!」

額に汗をかき、こめかみに血管を浮き上がらせ踏ん張っていた。くっ……なにか打開策は……っ! あった。一か八かだ。

ブローケン・ファンタズム
『壊れた幻想』

魔力の爆発。視界が一瞬にして白に染まった。

再び目を開けたとき、そこにあったのは穿たれたクレーターと、悪魔が持っていた斧が残っていた。

英雄の夢（後書き）

まさか八〇〇〇文字を超えることになるとは思わなかったわ。

もう一度言っておきます。俺はF a t eについて知識が少ないです！

なぜそんな知識でこんな小説を書いてるの？という疑問には目をつむってください！

ちなみに、強いて応えるなら「アーチャーかけー！」と思ったからです。こんな理由でごめんなさい。

まあ、話的にはF a t eと関係ないということで、どうか許してください。

さて、「幻獣」の詳細ですが……ブレイザードライブというゲームに出てくる武器を自分なりにアレンジしたものです。

弾丸は術者自らの意識で作られ、マガジン交換が必要ない。重量はかなりあるけど、デザートイーグルよりは軽いと思ってください。

そして、物質化してないけど名前だけ出てきた「神の縛」ですが、それは作中での説明通りです。神秘的なものは例外なく縛りあげる。エクスカリバー3発分くらいの魔力を放出すれば、紐が切れるかも（曖昧）。

さて、次の更新はいつになることやら……。あ、こっちの方を書いてるせいで、他の連載中小説が更新不足になってますが、ご了承を……。こっちの小説のネタがドンドン浮かんできたり、ストーリーを忘れないうちに書いておいてしまいたいという願望からなんで

すげどね。

まあ、連載中「人形遣い」の方もよろしくです。

そんな存在に憧れ、涙した夜もあったものだ

鉄と鉄が交わる剣戟の極地。

全てが偽善。^{ニセモノ}

だが、偽善^{ニセモノ}が悪に敵わないなんて道理は、ない。^{ホンモノ}

英雄に聞かされた、言葉。

偽物が本物に敵わないなんて、バカの考えだ。俺もそう思った。

本物を悉くを凌駕して叩き潰す存在。

そんな存在に憧れ、涙した夜もあったものだ。

さて、悪魔の集会の理由、悪魔討伐等のノルマをクリアした。その後、そのビルの調査をした。

調査とは、言ってしまうえば悪魔がなにか細工をしていないか、というもの。

ビルの中は魔力の流れもなにもなかった。故に、調査の結果は「異常無し」というものだった。

まだ数体、悪魔が残っていたが、どうやらあの親玉が倒されたと

あつてビビって逃げてしまったらしい。

そう言うわけで、初任務は完璧と言っても過言ではない結果で終わりを迎えたのだった。

後はその結果報告を今日中に済ませ、帰りに買い物に行こうと急いでいた……のだが。

「これからは、俺が先頭を歩くことにしよう……」

「うう……、そうしてくれると助かるわ」

迷っていた。一体、何回迷子になってくれれば気が住むのだ、この娘は。

自信満々に歩いていった結果、道が開けたかと思えば野犬の群れに遭遇し追いかけられ、野犬を振り払ったと思うと、不良が屯っていて金を要求されたり追いかけられたり、その不良を振り切ったと思えば、どこかゴツイ男に出くわし、「俺の技の練習台になってみないか？」ときやがった。勿論逃げた。

唯は、いろいろなものに引き寄せられるタイプなのかもしれない。故に、今度からは俺が先頭を立て歩くことにした、ということだ。

さて、と。いつまでも迷っているのも疲れる。なにより、買い物する時間がなくなってしまう。さっさと教会に行くことにしよう。

「邪魔するぞ」

「え、え!?!? また!?!?」

お姫様抱っこ、というのは便利だ。相手が女ならば、大抵大人しくなる。いや、一度だけ顔を蹴られたことがあったな……。

そんな苦い思い出を噛みしめながら、跳躍し、教会を見つける。

「よし、ちゃんと捕まっているよ?」

「は、はい」

そのまま、木々を足場にして俺はドンドン進んでいった。

Side 唯

私は今、お姫様抱っこをされてしまっていたりする。なんで？

ホワイ？

きっと、顔を真っ赤にさせていることだろう。

お兄ちゃん……じゃない、士郎はそんな私に見向きもせず、前を向いて進んでいた。

その顔が、ちょっと懐かしいとさえ感じた。虐められがちだった私を庇ってくれていた、あの頃のお兄ちゃんの顔。

でも、そのお兄ちゃんは今、お兄ちゃんじゃない。記憶を無くして、自分の名前さえも忘れてしまっている。

私は覚えている。お兄ちゃんの本名は「桐谷士郎」だと。いつの日か、私を助けてくれた英雄と、同じ名前。その英雄に、私は酷いことをしてしまった。

折角助けてくれた命だったのに、私は小学六年のとき、交通事故で死んだ。その死んだ瞬間があまりにも生々しい記憶として残っている。

その日まで、お兄ちゃんは私の味方だった。私を助ける事が正義だと言って、微笑み掛けてくれた。あの真っ黒な髪は、もう面影も無くなってしまっている。髪は白く、肌は……懐かしい。夏休みとか外で遊んで日焼けした日の様にちょっと黒くなっている。

まるでその姿は、あの、英雄の様だった。髪がオールバックになったら、きっとエミヤシロウそのものになるのだろう。

あの、寂しい背中を持った人と、似ている。ということは、きっとエミヤシロウと同じ生き方をしたのだろう。

私は、何年も待った。不謹慎なのは分かっている。それでも、いつお兄ちゃんがこの世に来てくれるのだろうかって、指折り数えて待つ

ていた。

そして、やっと会えた。エクソシストのもう一つの役目。この世に降り立った人に、この世の説明などをする事。本来、部隊長格は、そんな仕事を承らない。だけど、珍しく「やってみようかな」と思ったのだ。結局、その思いのおかげでお兄ちゃんに会えたのだけれど。

悪戯で、あなたは誰？ とか言ってみたけど、その返答は悲しい物だった。

「正義の味方を目指した男」

その声色が、悲しかった。疲れ果てていた。お兄ちゃんにも、悪いことをしたと思った。ずっと守ってくれていたのに、お兄ちゃんの誕生日の日に死んでしまったのだから。

きつとお兄ちゃんは、私がいなくなつて「守るべき者」というものが分からなくなつてしまつたんだと思う。だけど、お兄ちゃんは「正義の味方」を目指した。どこに進んでいるのかも分からないまま。私が死んだことで、その目指すべき道が分からなくなつたんだと思う。お兄ちゃんは、世界中の全ての人を助けようと思ったのかもしれない。でも、現実には悲しい物だったのだろう。

誰かを殺さなくては正義の成せないあのふざけた世界。

誰かを殺さないと誰かを生かすことができないあのくだらない世界。

誰かを見捨てないと誰も救えないあの馬鹿らしい世界。

私は、少し泣きそうになつた。

正午に感じた気持ち悪さはなかった。頬を掠める風が心地いいと

さえ感じた。でも、少し寒いかな。

この人は、私のお兄ちゃんなんだもん。少しくらい、甘えてもいいよね。

お兄ちゃんの体温は、私を暖める様に伝わってきた。

S i d e 士郎

さっきはとばし過ぎたか、と反省し少し加減をして木々を足場に進んでいった。

なんとなく、唯の顔を見ると……寝ているようだ。気持ちよさげに俺の胸に顔を擦りつけてくる。その様子が、なんだか猫のようで、少し微笑ましいとさえ思ってしまう。

……本当に、妹なのかもしれない。

というか、百パーセントの確率だろう。俺の本名を知っていて、銀髪も、俺みたいに色が変わってしまっただけというのなら……。この世界では歳を取らないそうだ。死んだ瞬間の年齢のままか、或いは若返ってこの世に来る。なんて良い世界だろう。そう思えるかもしれない。けど、自然死がないというのは、とても苦しい世界なのだと思う。

そして、数分の時間を要して教会にたどり着いた。

唯は寝たまま目を覚まさなかった。その寝顔が、あまりに愛くるしかった。お姫様抱っこから、なんとか背中に背負う形にした。起

こさないように慎重に行動するのは、結構疲れる。けどその疲れさえ、懐かしく、楽しい。妹の世話をしていた日は、毎日そうだった。疲れて楽しくて面白くて。時には妹は拗ねたりもしていた。その姿もまた愛くるしいものだった。

ああ、本当に、懐かしい。

「えっと、お疲れ様です。桐谷士郎副部隊長」

「は？」

受付に座っているメガネ少女に言われ、絶句した。

……待ってほしい。俺はいつ、どこでこの副部隊長になった。

「あれ？ ご存じありませんか？」

「ああ、全く」

「そうですか。では説明させてもらいます。あなたは、今寝ておられる桐谷二番隊部隊長の推薦により、二番隊の副部隊長になったのです。実力も、それなりにあるということで、総司令官様もすぐに許可を出したそうですよ」

総司令官というのは、あのご老人のことだろう。

しかし、話が急過ぎる。新入りである俺がいきなり副部隊長とは……。

「まあ、あとで唯に問い詰めるとしよう……。それより、任務の報告だが」

「はい。まずは、集会の理由ですが……」

「……愛くるしい寝顔ですね」

「ん、ああ。そうだな」

なんとか俺一人で任務の結果報告を終えた。

それから、唯の寝顔から始まり、唯の仕草だとか、そういう話を

した。

「それにしても、君は――」

「ユリ」

「……へ？」

「私の名前です。いつまでも『君』とか呼ばれるのは不本意なので、ユリとお呼びください」

ふむ……まあ、女性からの要請だ。断るわけにもいかんだろう。

「うむ……。じゃあ、ユリは随分とその……唯について詳しいのかな」

それを聞いたユリは、少し驚いた様な顔を見せた。

しかし、その後すぐに苦笑した。

「ええ、これでも結構長い付き合いですから」

確かに、そうなのだろう。あの妹が死んでから、もう二十年は経っている。その時からユリがここにいるのなら、俺なんかよりも唯と付き合いが長いことになる。

まあ、もし唯が俺の妹だったらという条件付きの計算だが。なんせ、妹の名前は覚えていない。容姿は覚えているのに……。

「ん……、ん？」

「おや、お姫様がお目覚めの様だ」

「ですね」

「へ？」

唯は少し驚いたのだろう。目を点にしている。

そして、次の瞬間には現状を理解したのか、顔を赤く染めていた。それこそ、煙が出て不思議じゃないくらい。それから、数十分もお姫様抱っこしても背負っても、重さを感じない軽い体を地面に下ろす。

「えっと、ごめ。重かった？」

「いやいや、軽過ぎて心配したよ」

これは事実。何せ、冷凍食品ばかり食べていたのだ。心配にもな

るだろう？ 健康面で。

さて、と。

「それでは、唯も目を覚ました訳だし、そろそろ買い物に行きたいのだが……」

「そうですね。ここに来てから、もう数十分経ちますからね」

「ええ！？ そんなに経ってるの？ほんとにごめんね、士郎」
本当に申し訳なさそうに言っている。

いや、そんな目で謝られても……。

「俺は別に怒っていない。謝らなくても良い」
「う、うん」

納得がいかないかのように、曖昧に頷く唯。

「それでは、失礼するよ。ユリ」

「はい、また明日」

さて、今晚のご飯は豚肉を焼いて手作りソースに絡めたもの。更に、レタスとトマト、卵が主体のサラダ。で、白米。

聞くだけでは少なくて感じるかもしれないが、量はある。せめて明日の朝までにはお腹が減らない程度には。

「で、どういうことだ？ 俺が副部隊長とは……」

ご飯の最中に仕事の話は、できれば避けたいのだが、こればかりは早々に聞いておく必要がある。後になって聞くのを忘れていた、では話にならない。

「どういうことって……。士郎は私のパートナーなんだから、仕方ないじゃない。ちゃんと総司令官の許可も取ったし。うん、なんの問題もないじゃない」

「……いいのか？ 新米の俺が急に二番隊の、それも副部隊長などと言う立場に立ってしまって」

「別にいいんじゃない？ 許可も出てるんだし」

「大事なのは許可云々じゃなくてだね……」

俺が言いたいのは、誰かの恨みを買わないかということだ。それこそ、俺が来る前まで副部隊長をしていた者とか、その副部隊長の座を狙っていた者とか。

「その点は大丈夫よ。部隊長と副部隊長はパートナー関係にあるのよ。だから、私が認めて、私の背中を任せられるか判断しないと副部隊長にはなれないから」

つまり、なんだ？

座を狙っていたとしても、唯が頼れると信じ切れて、更に十分な実力を持ち得ないと副部隊長にはなれない。その座を狙うには、唯に媚び売りをするほかないのかもしれない。

「今のところ、媚び売ってくる人はいないから大丈夫よ」
ということだそう。

「だが、前の副部隊長は……」

「いないから」

「え……？」

「だから、副部隊長はいなかったの。私が副部隊長の席を開けてたのよ。いつか信頼できる人が来る時のためにね」

その信頼できる人というのが、俺だったと言うことか。確かに、それなら安全そう。まあ、一つの問題が減って安心した。

「それでは、さっさと食べてしまおうか。もう八時だ。そろそろ、シャワーも浴びてきたい頃だろう？」

「んー、そうね。シャワー……シャワー……あうう」

なんか、急に頬を染め始めた。

……ああ、初日のことを思い出したのか。いかんいかん。意識すると、こちらまで顔を赤くしてしまいそうだ……。

晩御飯も食べ終え、今は唯がシャワーに入っている。
俺は自室にこもり、あることを思考していた。

魔力回復が……されていない。

そう、俺の魔術回路の一部に支障が出ている。本来、ただ休んで
いるだけで魔力は回復する。だが、その回復がない。

「何故だ……」

自然回復以外に、魔力回復の方法を俺は知らない。危険だ。魔力
不足でいつ倒れるか、分かったもんじゃない。

「これからは、少し魔術を控えるとしようか……」

今日の戦闘は大きな痛手だ。

なんせ、『射殺す百頭』^{ナインライブス} 『干将・莫耶』^{アーヴァイン} 『幻銃』。更に、この前

は『約束された勝利の剣』^{エクスカリバー} と『暗闇を払うもの』^{ダークリバルサー} を作った。何より、

『約束された勝利の剣』^{エクスカリバー} は魔力をかなり食わせた。今の俺ができる
最大の投影は、『幻銃』^{アーヴァイン} と『干将・莫耶』くらいだろう。

魔力の回復ができない。つまり、魔力が尽きれば永遠の眠りにつ
いてしまうのかもしれない。

倒れても、魔力回復ができないのなら、永遠に目が覚める事は無
い。

「クソ……」

誰に言うわけでもなく、ただ、呟いた。

そんな存在に憧れ、涙した夜もあったものだ（後書き）

今回、初めてS i d oとかいうのやってみました。なんか他の一人称小説見るとやってる人多いらしいので（笑）。

さて、今回はなんの進展もないですね……故に後書きも短くなつてしまうと言う物です。

できれば、設定・新キャラとかのアイデアが欲しいです。いつの日か、出演させたいと思います。あとは、宝具のアイデアも募集中です！

あと、感想も募集中です！

まあ、よろしくお願いします。

三話目ということですが……、とりあえず、ここまで読んでくださってありがとうございます。

誤字・脱字等ありましたら、お教えください。

じゃあ、俺は？

化け物とはなんだろう。

血を吸えば化け物なのか。

人肉を食べば化け物なのか。

人を殺せば、化け物なのか。

いや、違う。理性を持って、自分の快樂のために人を殺めるのが、化物だ。

じゃあ、俺は？

爽やかな朝だ。

窓から光が差し込み、温かな日光が身体を照らしてくれる。それだけで、何かから救われた様な感覚になった。

「さて、今日も任務に行くのか？」

俺の質問に、唯は顎に指を当て、考えてから答えた。

「んゝ。そうね、今日は団体任務にでも行きましようか」

「団体任務？」

「そう。私達だけじゃなくて、二番隊の誰かとか、或いは他の隊とかと一緒に任務に行くの」

というわけで、団体任務に行くことになったのだが。

「なぜお前がいる」

「それはこちらのセリフだ。なぜ君がいる」

俺と唯、一番隊部隊長のリエ。そして、一番隊副部隊長のクロキ。

「ま、まあまあ。二人とも」

唯が苦笑いしながらその場の陰悪な空気を和ませようとする。

「そうだよ。ユイにゃんの言うとおりに！ 仲良くいこう！ オー！」

このテンションが高いのが一番隊の部隊長と言うのだが……大丈夫なのかエクソシスト。

「そのユイにゃんっていうのやめない？ 恥ずかしいよ……」

「えー！ なんで？ 可愛いじゃん！」

「うわああ！？ ちょ、リエー……」

そう言いながら抱きつくリエ。それに驚く唯。うむ、美少女というのが揃うと、そんな光景も美しく見えてしまうな。

「……我らの主は仲が良いようで何よりだな？ クロキ」

「……ああ、俺達も、仲良く行こうか？ 士郎」

「ああ、それはいい案だ。じゃ、武器を構えようか」

「ふん、言われなくても」

そう言いつつ、二刀の剣を投影する。

……しまった。無駄な魔力を使ってしまった。なんの概念もない武装だが、剣だ。魔力を使うのには変わりない。

いや、このまま出しておけば問題ないか。物質化してからは、勝手に形を保ってくれる俺の便利な特徴のおかげで助かった。

「もう、この二人は……。ほら、行くよ。場所は死山^{しにやま}だってさ」

「死山？ どこだそれは」

「そんなことも知らないのか。無知なヤツだ」

「……どうやら、クロキは俺と喧嘩をお望みの様だな」

「……当たり前だろう」

「ストーップ！ もう、なんでそんなに仲悪いのよ……って！
いい加減離れなさい、リエ！」

これが一番隊と二番隊の会話でいいのだろうか。もっとお堅い関係の方が……。いや、これがエクソシストのスタイルなのだろう。

それに、リエの全てを包み込む様な魔力。首は魔力殺しのアクセサリーが付いている様だが、その魔力殺しを以てしても、これだけの魔力が漏れている。殺気とかじゃなく、全てを包み込む様な。それでいて、いつ潰されてもおかしくない様な。

「……あれでも、実力はかなりのものだ。お前でも勝てないと思うぞ、士郎」

そう言ったのは、意外なことにクロキだった。

「ああ、直感が告げているよ。アレとだけは殺り合うな、とね」

「ふう」

クロキは一息ついてから、目をつむった。数秒後、目を開けた。
何かを思想していたのだろうか……。

「……今のは？」

「ふん、お前には関係ない」

……イケスカない奴だ。

「もう、いいから。死山に行くわよ」

「オー！」

リエだけが、無駄なテンションの高さで答えた。

死山とは、言ってしまうばただの山だった。だが、自然の魔力が
大気に充ち溢れている。これなら、小さな魔力で大きな武器を作る

ことも可能かもしれない。

しかし、その大気に満ちる魔力の他に、別の魔力も確認できた。

「悪魔、か？」

「ええ、そうね。……それにしても、士郎のその格好。なんとかした方が良くもね」

俺が今身につけているのは、黒のスーツだ。一般的なスーツ。生前来ていた鎧を投影しようとしたが、無駄な魔力を使えば我が身を滅ぼす。故に、こうなっている。

「なんとかした方がいい、というのは？」

「悪魔っていうのは、基本的に魔術を行使するのよ」
やはりか。それは予想していたことだ。

「んで、対魔術用の服くらいは着た方が……」

「ふむ……俺は別に、これで構わんのだがね」

スーツは、身体に結構フィットしていて動きやすい。これなら、別段困る様なことはないだろう。

「動きやすいっていてもねえ……」

「それより、ここからどう進んでいくんだ？」

木が左右に生い茂る道が開けた。

その先に見えるのは……崖。そして、崖の向こう側にまた道が続いている。

「これは……少なからず、魔力が残留しているな。悪魔が暴れたのか？」

「そうみたいだね、まあ、みんな自身の強化魔術くらいでできるでしょ？　ならノーマンタイ！」

リエが、笑顔でそう言う。

……背に腹は代えられん、か。仕方ない、最低限の魔力を以てして強化することにしよう。

と、まあちよつとした苦難に会いながらも、頂上についた。

「……この中か」

「この中だね……」

頂上にあったのは、大きな穴。ここが悪魔の拠点なのだろう。魔力が流れている。

「入ってみるしか、ないだろう」

提案したのはクロキ。そこにいた全員、それに賛同した。

「なんて所だ……。これほどの魔力の凝縮。悪魔と言えど、一個人で扱えるものではないな」

俺の発言は、この場の全員の心の中の代弁と言っているだろう。

リエ以外の人は、全員が全員真剣な表情になっている。

……そういつても、クロキは元から無表情ときた。真剣なのか、地なのか……。唯は一目で真剣かどうか分かるのになあ。

「おい、そこで何をしている」

……！？ 後ろか！

黒い奴が、そこにいた。

「……悪魔と魔物の合成って知っているか？ エクソシスト諸君」

なんお前触れもなく、悪魔がそんなことを聞いてきた。

そんなもの、俺が知る筈がない。

「悪魔と魔物の合成。それをする事で、何か良いことがあるのか？」

クロキは冷静に答えた。

「ああ、悪魔は知能を持つことができる。魔物は身体能力を持つことができる。この二つが交わると、とんでもない化け物が生まれるんだよ。まあ、悪魔個人でもそれなりの身体能力を持つから、そこ

に魔物の身体能力が重なればどうなるか。君たちなら理解できるだろう?」

理解したくもないが、理解できる。

なるほど……合成か。地面には、所々に歪な形の魔法陣が描かれている。

「それで? その合成された奴らは、どこにいるんだ?」

「……さあね。案外、逃げてしまって町に被害を及ぼしているかもしれないよ」

悪魔の口が三日月に裂き、笑った。

「っふ。何を言っているんだ。既に、俺達の周りを囲んでいるくせにな」

「え……」

俺の発言に唯が驚いたような声を出した。

「……どこで気付いた」

悪魔は笑うのを止め、真剣な表情で言った。

「いやなに、ちょっと鎌を掛けてみたのだが……。凶星だった様だね」

「……!?!? 貴様……。テメーらやっちゃまえ!!」

悪魔がそう言うのと、周りに姿を消していたモノが現れた。数は、五十だろうか。かなり多い。だが、

「クロキ、共戦だ。今日だけ特別にな」

「ああ、そうだな」

俺とクロキがいれば、問題ないだろう。

しかし。姿を現した者を見て、少しばかり驚いた。

人の形の部分はある。だが、理性があるようには、見えない。白目を剥き、牙を剥き、背中から蜘蛛の様な足を伸ばしている。

「グオオオオオッオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!」

叫びながら、周りの魔物どもが襲いかかってきた。

「「唯（リエ）はそこにいろ！」」
俺とクロキは同時に叫んだ。

そっからは、乱舞だった。ただただ乱舞。クロキとの喧嘩の際に投影した、なんの概念もない、ただ斬る為にのみ存在する剣を懷から取り出し、襲いかかってきた物を切り裂いた。

クロキはガラディーンを召喚し、風を纏いとてもない速度で敵陣を蹂躪している。

俺のときは、加減をしていたのが良く分かる。だが、その加減が命取りだった訳だが。

さあ、さっさと終わらせることにしようか。

S i d e 唯

士郎は、踊り狂う様に敵を切り裂いていった。回転し、跳びはね、切り裂く。相手の血が飛び散る中、士郎がどれだけの死地を乗り越えてきたかが分かる。

私も後方支援しないと！

そう、思った時だった。

S i d e 士郎

「キャアアア！」

悲鳴が聞こえた。聞こえた場所を見ると、唯が触手の様な物に捕まっていた。

「クッソ、完全に迂闊だった！」

思わず、口にする。

相手は悪魔。どんな卑怯な手に出るか、分かったモノじゃない。
「この女を助けたければ、さっさと全部倒せよ？　じゃないと、この娘が死んじゃうよ」

「あっ……うう……」

触手は首に纏わりつき、唯の細い首を潰そうとしてくる。

しかし、触手の出所を見て、また驚いた。あの悪魔の腕から、片手に五本ずつ。触手が伸びていた。つまり、計十本。更に、一本一本がかなり太い。一撃で斬り落とせるか、分からない。

「うあっ！　……くう……！！！」

そう解析している間にも、唯は締めつけられる。

「ぐっ……！！？」

油断した。相手の一匹の足に吹き飛ばされた。

「シロツ……！　むぐ……」

唯は叫ぼうとしたが、触手が遮った。

頭に血がのぼる。ヤバイ、久しぶりだ。この感覚。妹を虐めてた奴を、追い払ったときみたいな気持ち。

「あああああああああ！」

俺は、咆哮を上げた。

S i d e 唯

どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう。

完全に油断してた。二番隊部隊長の私が、こんな無様に……。士郎がいるからって安心してた。自分の不甲斐なさに腹が立つ。

そんな時、私の方を見て悔しそうに顔を歪めた士郎が吹き飛ばさ

れた。壁に激突して、凄い衝撃だった。

「シロツ……！ むぐ……」

やだ！ 口の中に触手が……！ 気持ち悪い！

歯を立てても、ヌメヌメした感触に歯触りが敏感に反応して、嫌な気分になる。

その時、一つの咆哮が聞こえた。

「あああああああああ！」

その主は、探すまでもなく士郎。

そこで、私は思っではいけないことを思ってしまった。

——士郎が、怖い。

そう、思ってしまった。

その恐怖は、士郎が士郎でなくなってしまう気がしたから。

でも、士郎が士郎でなくなってしまうなんて……ないよね。そうだよ、お兄ちゃん？

S i d e 士郎

クソ……。

もう魔術を使えないとか言ってる場合じゃない！

気付くと、クロキは周りの雑魚に気を取られ、こちらまで手が回せない状況だった。リエも同じく、と言ったところか。いや、俺の方に魔物共が行かない様にしてるのか？ かなり力を持て余している様に見える。

なら、その好意に甘えさせてもらって、存分に唯を助けさせてもらおうか。

さっきの一撃の所為か……。二刀は碎け散っていた。だが、それがどうした。無いなら作ればいい。そう、作ればいいのだ。

――トレース
――投影、開始。

自己暗示。本来、これは投影魔術とは別物だから、そんなことを
咄く必要がない。だけど、咄くことで自分が使っているのは投影魔
術だと思わせる。イメージさせる。大量の剣を。内部構造を完全に
把握し、剣を完璧に複製させる。

まず、干将・莫耶。それを両手に持つ。これは保険。
そして、本命。空中に描いた大量の剣を投影する。
次々と剣が作られる音が聞こえる。

――やばい……。魔力が……。

――気にするな！

――もう、底を尽きる……。

――気にしてはいけない！

――そう、気にしない。

――決めただろう。

――例え、自分の力が底を尽きようとも、

——妹だけは……唯だけは助けるのだと。

「それが……………『俺の正義』だった！」

何かが、弾ける音がした。割れる音とも言うのだろう。
魔術回路が、壊れかけている……のか？

そんな魔術回路に、鞭を打つ。作れ、まだまだ作れ。

あの触手全ての行動をできない様に突きす刃を。

あの触手全てを断ち切る程の刃を。

唯を助ける為の刃を！

——トレース 投影、完了。オフ

軽い電撃が頭に走る様な痛みと同時に、自動的に投影が完了された。魔術回路が危険を察知し、強制的に終了させたのだろう。

——投影待機、射出準備完了。

「——停止解凍。全投影一斉射出！！」

その叫び声ともとれる大声と共に、身体が引き裂かれる様な感覚に陥った。とてもではないが、意識を保っていられる激痛ではない。

そして、作りだされた刀剣と槍は、撃ちだされる。音速と言っても過言ではない速度で。

剣戟。剣戟。剣戟。剣戟。ただ、剣戟を振るう。

土煙と鮮血、肉塊を飛び散らせながら、突き刺さる。

「ぐ、あああああ！ や、めろおお！」

悪魔の声なんて聞こえない。ただ、唯を縛る触手と悪魔に、剣戟の鉄槌を下す。

足に、筋肉に、骨に、腸に、胃に、肺に、心臓に、喉に、口に、目に。

次々に刺さる剣、刀、槍。

そして、投影された全ての刀剣と槍が射出された。残るのは砂埃。

砂埃が立ちこもる。風がないからだろう。そんな中から、唯が出てきた。

「ゲホッゲホッ……」

「す、すまん唯！ 無事か……？」

柄にもなく唯に駆け寄る。たぶん、顔は泣きそうになっているかもしれない。さっきまで意識していなかったが、あの攻撃はするべきではなかった。先程言ったように、ここに風は吹かない。砂埃は立ち籠るばかりだし、なにより、唯が危険だった。

「まったく……でも、助けてくれてありがとう、士郎♪」

心配は不要だったらしい。

唯は笑顔で礼を述べた。

そして、やっと砂煙が外に出ていった。

そこに残ったのは、残骸だった。肉塊とも言える。

「とんでもない攻撃ね……」

リエが、静かに言った。

確かに、とんでもないのかもしれない。だが、魔力があればこの程度の攻撃は簡単。だが、今は……あ、目眩が……。

そのまま俺はうつ伏せに倒れ、意識を失った。

S i d e
唯

「し、士郎！」

呼吸と脈を確認……うん、生きてる。

けど、魔力をあまり感じない。……魔力不足？

「と、とりあえず帰ろう。士郎は俺が背負っていく」

クロキが頼もしくそう言うと、士郎を背負ってくれた

「じゃあユイにゃんは私が背負っていく〜！」

こんなときでも愉快なりエである。

「だ、大丈夫だよ。私は歩けるから」

「ブーブー！」

ブーイングされた。けどまあ、うん、受け流そう。

足を魔術による強化。思いつ切り跳躍する。そして、死山しにやまの頂上
の穴から脱出して

、私たちは教会に向かった。

士郎は目を覚まさない。数日経った今も、魔力の回復が見られな
い。

「……どうなっちゃうんだろ」

「ふむ……士郎副部隊長のいる医務室はここで合ってるかの？」

扉が開く音ともに、総司令官が立っていた。

「総司令官、士郎は……お兄ちゃんはどうかちやうんですか？」

魔力が全然戻らないんです！ 折角、見つけたのに……。また、私
は一人になっちゃうんですか……？ お兄ちゃんは、死んじやうん
ですか!？」

自分でもビククリするくらい、私は取りみだしていた。気付くと、
私は総司令官の胸ぐらをつかみ、揺すっていた。

「……あ……。ごめんなさい」

「いやいや、構わんよ。実の兄が見つかったのにこの様じゃ。取り乱してしまうのも、理解は難しくない」

優しく、頭を撫でながら総司令官は言った。

「それに、まだ助かるかもしれんぞ？」

「え」

今、総司令官はなんて言った？ 助かる？ お兄ちゃんが？

「ほ、ホント……ですか？」

「ああ、本当じゃ。じゃがなあ……少し問題があるんじゃないよ」

「問題……ですか？」

総司令官の言う問題は、結構大変なものだった。

まず、概要は私の魔力をお兄ちゃんに分け与えると言うこと。そしてその方法だが……。

「え……。キ、キキ……キス!？」

「そうじゃ。口移しで魔力を分ける。それが最も効率的じゃ。随分昔、ある男がこういう状況に陥ったことがあっての。その男は、パートナーである女の魔力を口移しで分けてもらい生存していた」

な、なんでそんな方法で魔力を……。分け与えやすいからって、そんなキキ、キスとか！

「ほ、他に方法はないんですか！？」

総司令官は数秒だけ考える様な素振りを見せてから、言った。

「性行為をしてお互いの気を高——」却下です！」……じゃろうな」
性行為とか……キスのがマシじゃん！

総司令官も、やはりこんなことは稀にしかなく、助ける方法も知らない。やはりキ……口移しで魔力供給するしかない、ということだった。

「う……うう」

「もう諦めろ。このままでは、士郎副部隊長は永遠に目を覚まさんぞ？」

確かに、その通り。異論も反論もできない。

あー、もう！ どうにでもなれ！

「え、えと……どうすれば口移しで魔力供給を？」

「ふむ、やっとその気になったか。……簡単じゃ、魔力を口に集中して士郎副部隊長の口に流し込む。あとは、自然と体に魔力が廻っていくはずじゃ」

……それって口から口じゃないとダメなの？

そういう疑問に、総司令官は「効率の問題じゃ」と答え、部屋を出ていった。

「し、仕方がないのよ。そう、仕方がないこと」
誰に言うでもなく、自分の言い聞かせた。

たぶん、かなり顔は赤くなっていると思う。それこそトマトの様に。

「う、うう……ごめん！」

なんで謝ったのかは知らない。けど、まあ、寝てる間に唇を奪うわけだし、謝るのは正解だね？

ゆっくり、バクバクしてる心臓を抑えて慎重に……。

「ん……………」

……………。

……………。

……………。

……………あれ？　これってどれくらいキスしてればいいんだろう。

まあ、魔力も多ければ多い方がいいんだし……お兄ちゃんが目を覚ます時くらいまで、しててもいいよね。

酸欠で倒れそう……。

S i d o 士郎

目を覚ましたら、唯の顔がすぐそこにあつた。……何故さ。

「……！？」

目を閉じていた唯も、俺が目覚めたことに気が付いたらしい。すぐに顔が赤くなった。

それから、数秒フリーズしてから顔をどかした。

……む、身体が軽い。

そう思いながら、体の状態を起こす。

「えっと、ね。これはそのえっと、えっと……」

なにやら弁解しようとしているが、そうしてる間にも顔はどんどん赤くなっていた。

「おい、大丈夫か？ 俺よりも、君の方が寝ていた方が良い様な顔色だが……」

とりあえず、会話だ。会話のドッチボールは大事ですよ。……キヤッチボールか。

「う、うん。大丈夫。そ、それより……！ 士郎は自分の魔力が回復しないって、気付かなかったの？」

……なるほど、あの投影でかなりの魔力を食った。そこで俺は倒れたということか。永遠に目を覚まさない覚悟もしていたのだがね。「ああ、すまない。そんな感じもしていたのだが……まさか、本当に回復していなかったとはね。自分でも驚いているよ」と、誤魔化すのが一番の選択だろう。

「……嘘」

「え？」

「嘘でしょ？」

「……なぜ、そう思う？」

「だって、士郎だよ？ ここまで規格外の力を持ってたのに、自分の魔力の量が分からないはず、ないじゃない」

……なるほど。唯もなかなか、良く人のことを分かっている。

「……すまん」

「なんで、言ってくれなかったの？ 倒れる前に解決できたかもしれないのに、なんで？」

「……」

「そんなに信用ない？ 私は……士郎の……」

「ああ、妹だ。信用してないわけじゃあない」

そう言った瞬間、唯は体をビクツとさせた。

「……記憶、戻ったの？」

「どうだろうな。まだ、パズルの様にバラバラだ。だが、ある程度
思い出したと言っているだろう」

「そう、じゃあ、思いつ切り甘えても……いい？」

俺は無言で、しかし確かに、ゆっくりと頷いた。

「お兄、ちゃん……お兄ちゃん！」

叫ぶと、俺の胸部にタツクルと言っても過言ではない威力で抱き
ついてきた。

唯は嗚咽を堪える様にしながら泣いていた。嗚咽は抑えられる。
けど、溢れてくる涙は、抑えられないようだった。

これでは、服がぬれてしまうな。だがまあ、仕方ないか。

そんな場違いなことを考えながら、唯を抱き返した。

生前でも抱き合うなんてことはあまり無かったけど、こうしてみ
ると、唯の体は本当に小さい。

——ならば、守ろう。大それた魔力を持つわけでもない。魔力供
給もこれから唯に任せることになるだろう。だが、守ろう。この小
さく、か細く、少し力を入れれば折れてしまう程に華奢な体を持つ
存在を叩き潰そうとする存在から。俺の魔力回路が、身体が壊れよ
うとも、守り続けよう。この世の全ての人を敵にまわそうとも、守
ることを止めないでいよう。だってそれが、俺の——。

——正義であり誓。これは偽善だと笑われるだろうか。正義の原
型をとどめていないと、嘲笑されるだろうか。正義とは助けを請う
全ての人を助け、守ることだ。だが、俺にそれはできなかった、な

らば。せめてこの小さな存在だけは、守り抜くんだ。

唯は、それから数十分、泣きやむことはなかった。

じゃあ、俺は？（後書き）

なんかSide使い過ぎた？

まあ、そんなことを思いながらも投稿した訳なんですけど……。

なんか急展開ですネ！

そんな言葉が、皆さんの心の中にあるかもしれません。いや、俺自身がそう思ったのですから、そうなのでしょう。

なんかサーセン。

まあ、兄として唯を守っていく決意を固めた士郎君に免じて許してください。

評価と感想、お待ちしております。

そして、**審判は下る**

とある部屋の片隅。

真っ白で殺風景な部屋。故に、赤黒い液体が映える。

「私は親を殺して、ここに來た人を全て殺しました。

だから神様、どうか私を裁いてください」

そう言う少女の声は、怯えている様にも聞こえる。

だから、神は。その少女に与える罰を考える。

慈悲も優しさも、持ち合わせていない。悪魔の様な神。

そして、審判は下る。

「さて、今日もいつも通り。爽やかな朝だ」
本当に、爽やかな朝だ。

小鳥の囀り。都会に映える木々のざわめき。何より、白い部屋に
充満する名高き紅茶の香り。

本当に、爽やかな朝だ！

「現実逃避してないで、さっさと任務に行くわよ」

その爽やかな朝に聞こえる、俺の部屋に残響する正に鈴の様な音色。幼い容姿に合う高い声。そして、粒子を放出させる様に見えるほど輝く銀髪。澄んでいる赤い瞳。

無論、誰と言うまでもなく、唯だ。

「……はあ。君一人で行ってきたらどうだ？　俺は、無駄に魔力を消費したくない」

そう。それがこの俺、桐谷士郎が現実逃避している理由。

魔力を消費しても回復はしない。それは今も変わることはない。俺の魔力容量は、少ない。生前は持ち前の回復力で、次から次へと投影していたが……。

自力での回復ができない。回復するには唯と口づけをする他に方法がない、というのは、あのご老人の言葉だ。

「一度死んだとは言え兄妹は兄妹。その様な行為、許されぬ！」

それが、正義の味方ではなく、桐谷士郎である俺の考えだ。正義の味方である俺ならば、困っている人のために任務をやろう、と言うだろう。それこそ、魔力供給が妹との口付けであろうとも、だ。

まあ、そんな時に唯が新たな任務を請け負ってきたというわけだ。

任務名を『吸血鬼退治』。悪魔ではなく、吸血鬼。吸血鬼と言えば、悪魔なんぞ軽く凌駕する力を持ち、魔力を持つ。

そんなものと手合わせをしてみろ。一瞬にして魔力を消費する。

ちなみに、これが任務内容である。

『任務内容…近々、町はずれの洋館に吸血鬼が現れたという報告が入った。被害が拡大する前に、吸血鬼を処分せよ。』

場所 …町はずれの北に位置する洋館。

ノルマ …（一）吸血鬼の存在確認。（二）吸血鬼の処分

報酬 …ノルマクリアで十万。吸血鬼が存在しなかった場合は、即時報告。』

吸血鬼、というのは、俺が住んでいた世界で最強とも謳われる生命体。血を吸うことで、吸った対象を人形^{ドール}、或いは奴隷とすることができる。悪魔よりも恐れるべき存在。それが、この世でも存在してしまったというのだから、驚くほかあるまい。

「それで？ なぜその様な任務をわざわざ？ まさか、俺を魔力不足で殺す気か？」

どうも、俺には故意的に魔力不足を促そうとしている様にしか思えん。

「ち、違うわよ。ほ、ほら！ 報酬！ 十万も貰えるのに受けない理由なんてないでしょ！」

どこか焦った様に、或いは弁解するように言う唯。

「はぁ……。しかし、吸血鬼を処分すると言うのに、安い報酬だな」
少なくとも、あの世ならば吸血鬼退治には百万以上の報酬が貰える。それが、たったの十万。少なすぎる。不釣り合いだ。

「ああ、それはあの世の話でしょ？ この世はあの世と違って魔術の存在を一般人にも知られてる。だから、思いつ切り、どんな攻撃魔術でも行使できるってこと。だから手加減なしに叩き潰すことができるってことよ。あの世だと魔術の存在を隠す必要があるから」

「……それだけでは、ないのだろう？」

俺の言葉に、唯は目を閉じた。

「そう思う根拠は？」

「魔術を思いつ切り行使できる。ああ、それは吸血鬼退治をとても楽にしてくれるだろう。だが、その程度で百万から十万に成り下がるとは、到底思えん」

「……はあ。まあ、この世の吸血鬼って弱ってるのよ。あの世に比べて、ね」

吸血鬼の弱体化。

あの世では、吸血が簡単にできるが、この世ではエクソシストの存在がある。あの世に存在する組織に比べ、とてつもない組織力を持つのは言うまでもない。なにより、エクソシストは悪魔払いを専門としているが、一般人の安全を優先する。血を吸おうものなら、即刻エクソシストに情報が廻り、討伐される。

この世に来たばかりの吸血鬼は、神に見放された者として、普通の人間とは違う扱いになる。違いの一つとして挙げるならば、この世に来る扉が異常を来たす。つまり、俺がこの世に来て最初にいた部屋に行けないらしい。吸血鬼は適当な場所に放り投げられ、密かに生きる事のみを強要される。

更に言ってしまうと、一度吸血をすると、エクソシストに指名手配もどきをされる。故に、まともな吸血行動が起こせなくなる。吸血行動をしないと体力が無くなり衰弱していくのはこの世の常識である。

強い力を持つ吸血鬼も、暴れてはエクソシストに殺された、ということだ。

と、いうのが唯の説明である。

この世での吸血鬼は、とてもじゃないが吸血行動を行えない。それは解った。だがしかし……。

「吸血鬼は、必ず討伐しなくてはいけないのか？」

力が衰弱するなら、放っておいても問題ないのではないか。というのが俺の見解だ。

「吸血鬼は悪魔と同じ扱いよ。吸血鬼の組織が作られれば、それは大きな脅威になる。だから、先手を打って、できる限りの恐怖を植え付けて逆らえない様にしてるのよ」

それは、まあ、酷い話だと思うのはお門違いなのだろう。なんせ、相手は吸血鬼。生前は大量の殺人をした者たち。罰を受けるのは、当然。……いや、待て。じゃあ、俺は？

俺も人殺しをした。多くを助けるために多くを殺した。

殺した者の関係者からは恨まれ、憎まれ、呪われる。

助けた者の関係者からは喜ばれ、崇められ、裏切られる。

そんな俺が、吸血鬼と同じ末路を迎えないはずがない。神に同情された、か？

そんな思考を無理矢理断ちきらせた。今は、そんなことを考える場合じゃない。

「まあ、一般人の脅威になるなら仕方あるまい。さっさと処分をしないくことにしよう」

「ホント！？　じゃ、行こっか！」

唯は最高の笑顔を見せた。

北にある洋館。そこは絶句してしまう程に壊れていた。かつては美しかったであろう面影は欠片もない。庭であっただろう場所には

木々や草花が生い茂り、一種の芸術に様にも思える。窓ガラスは割れ、破片が地面に散乱している。煉瓦造りだったようで、壁の一部にある煉瓦は崩れ落ちている。

「……こんなところに人が住むとは思えんがね」

そんな一言に、唯は冷たく言い放った。

「人間じゃないわ。吸血鬼よ。ここに来たばかりの吸血鬼なら、私達の存在は知っていないはず。攻撃される可能性もあるから注意して」

唯は既に仕事モード。瞳は真剣を思わせるように鋭い物となっていた。

「分かってはいるよ」

これは、分かってはいるが解ってはいないという意味だ。まあ、唯はその意味を解っていないだろうが。

唯を先頭に、洋館の入り口となる扉を開け、中へと入っていった。

まあ、大方予想通りというところだろうか。

中は家具が散乱し、床は所々抜けている。天井が落ちている所さえある。

「さて、唯。これは……」

「うん、分かってる。……魔力が感じられないね」

吸血鬼も魔力を扱う。

ちなみに、吸血鬼には二種類ある。

ひとつは、吸血鬼の真祖。吸血鬼の大元。人間の形をしている者の中で、最強と言われる存在。

あとひとつ、真祖に血を吸われ、吸血鬼と為った者。真祖には劣るが、最強クラスの力を持つ。真祖に服従を誓う者もいれば、真祖を恨む者もいる。ちなみに真祖と違い、血を吸った者を吸血鬼にす

ることはできない。

真祖は、吸血鬼（真祖）特有の魔力を、対象の血に流し込むことで吸血鬼にする。だが真祖ではない吸血鬼は、吸血鬼特有の魔力が極端に、少ない。少なすぎるが故に、対象を吸血鬼にすることはできない。

さて、話が逸れた。

まあ、言ってしまうえばその魔力が感じられない。考えられるのは、吸血鬼がいない。もうひとつ、魔力が小さすぎて、感知できない。

「さて、適当に探っていくこととしよう」

魔力も感知できないならば、探す方法の一つ。手当たり次第。

さて、日が落ちる前に終わらせるとしよう。

で、結果的にだが……吸血鬼かどうかは知らぬが人はいる様子。探している途中にこちらに視線を感じた。見ると、それはすぐに逃げてしまったが、長い髪が特徴的だった。……で、言わせてもらおうと子供の様だ。見た影はとても小さかった。

そして残す部屋は一つ。先程の小さな存在……。直感が、告げる。この部屋にいます。

それは大層丈夫そうな扉だった。今までの部屋に付いていた扉は殆どが壊れていた。穴があいていたり、そもそも扉が外れていたりと。だが、この扉だけは別。壊れているどころか、傷一つ見つからない。

「……入ろう、唯」

「……うん」

さすがに、吸血鬼かもしれない存在にご対面とあっては、唯も緊張するのだろう。頬には一筋の汗が滴っている。

そして、ギギィ……という重い音を鳴らしながら、扉が開いた。
緊張のあまり、口が渴く。

「……………え」

しかし、俺と唯のリアクションは、小さなものだった。

「う、うう……」

呻きながら、薄いボロ布のようなもの——いや、掛け布団か？——
で身を包んで縮こまらせ、微弱ながら震えている。

明らかに、怯えている。

こちらを覗き、揺れている碧眼は小動物のそれだ。長い、恐らく
腰にまで届くのであろう金髪は、煤けてしまっている。

「これが、吸血鬼……？」

思わず、そんな言葉が漏れる。

なぜなら、若すぎる。いや、幼すぎる。

唯でも、十分に幼いと感じてしまう。当たり前だ。彼女は小学六
年生の体。だが、この幼子は……小学低学年、と言ったところだろ
う。

「……………」

唯は唇を噛みしめていた。恐らく、俺と同じことを思っているの
だろう。

「幾らなんでも、残酷だ……」

こんな若いうちに吸血鬼になり、死んだというのか。これ程怯え
てるということは、吸血鬼になって間もない。そんなうちに、死ん
だのか。残酷だ。俺が見てきた戦場などよりも、残酷だと思った。

「……………殺すのか？」

唯が一步踏み出した。それを止めるかの様な口調で言ったのは、

勿論俺だ。

「まだ、吸血鬼になって間もないだろう。この子は、処分対象になるのか？」

「仕方、ないじゃない。まさか、家に連れて帰ろうって言うの！？無理よ……。総司令官が黙っていないわ。それに、もう痩せ細ってる……。このまま放っておいても死んじゃうわ。なら、せめてこれ以上苦しまない様にするのが「すまない、唯。」……え？」

少し、取り乱している唯をなだめるように静かに遮った。

「……連れて帰ろう。この子はまだ幼い。殺すには、辛い」

俺の声は、部屋に静かに響いた。残響。反響。恐ろしいほどに、静か。

唯は、無言のままだった。俺も一步踏み出し、唯の様子を窺う。

……泣いている？

唯は、泣いていた。残酷すぎる現実に。

唯の頭に手を置き、優しく撫でた。

そして二、三回髪を指先で撫でると、吸血鬼に向かい足を進める。

「うう………！」

目をギュッと閉じる。恐らく、攻撃されると思ったのだろう。だが、攻撃はしない。さっき唯にしたように、煤けながらも美しい金髪を撫でた。

「大丈夫。攻撃をするつもりはないよ」

できる限りの笑顔で、言う。

俺の行動と発言。恐らく、吸血鬼である彼女にとって信じられないモノだったのだろう。意外なものを見る様に、俺の顔を覗き見た。まだ、怯えている様だ……。

「俺たちについてきて、くれるかい？」

「う、うん」

外見に合った、可愛らしい声で答えた。

家に帰ってから、まず、することがあった。服だ。彼女の衣類は、あのボロ布のみ。最早、衣類とは言えない。故に、唯の服を貸しているらしい。

「お待たせ、お兄ちゃん」

そうそう、唯は俺のことを「お兄ちゃん」と呼ぶようになった。俺の記憶が、少しながらも戻ったことを知ったからだろう。この響きは、とても懐かしい。何より、久しぶりすぎるが故に、二ヤけてしまったりもする。

さて、閑話休題。

「ああ、やはり、服のサイズは合わない様だな」

「まあ、さすがにね」

さっきまで暗い表情だった唯も、今は苦笑を浮かべている。

ズボンやスカートはサイズが合わなかったのだろう、穿いていない。だが、上はTシャツを着ている（ブカブカだが）。まあ、ブカブカとは言えTシャツを着るだけできちんと下まで隠れているのだから、彼女の体の小ささが良く分かる。

「そういえば、君は吸血鬼であっているのかね？」

「……？」

無言で首を傾げる。やはり幼く、吸血鬼がなんなのか理解していないのだろう。仕方がない。ちょっと強引な方法で確かめるとしよう。

一時間後。

……ああ、分かっているとも。女性の身支度を用意するには、それなりの時間と労力が必要なのだと。

「イリア？ その……まだ買うのかね？」

「ん、……だめ？」

くっ……。そんな目で見ないでくれ。

「いいや、ダメとは言っていないが……。うむ、存分に選んで来なさい」

「ん！」

今、俺達は大型デパートの衣類店にいる。なぜなら、イリアのサイズに合う服がないから。ついでに、自分の私服を買うためである（パジャマ・スーツは買っていたのだが肝心の私服を買っていないかった。いい加減、自分のバカ加減に頭を痛める）。

ちなみに、既に自分の私服は買っている。あとはイリアの服なのだが……フリフリのリボンだとかがついてるオシャレな物から、シンプルなTシャツにミニスカートまで。いろいろな物を買っている。「……パパ、これ買って！」

む……。？ 気のせいかな、今、イリアの声で「パパ」などと言う単語が聞こえた気が……。

「パパ！」

気のせいなどではなかった。

「……イリア？ その、確認するまでもないかもしれないが……パパ、というのは俺のことか？」

「ん！」

脱力した。

「ん？ どうかしたの、パパ？」

「いや、いや。なんでもないんだ。ああ、なんでもない」

イリア程の歳なのだ。両親というものが欲しいのだろう。……と、

なると。

「唯、ちょっと来てくれ」

「んー？」

イリアに聞こえない様に耳打ちをする。最も、唯と俺には背丈の差もあり、こちらが少し屈まなければいけないのだが。

「……………オーケー！ 解ったよ、お兄ちゃん」

「ああ、頼むぞ」

俺との会話を終え、唯はイリアの方に向かう。

「ねえ、イリア？ ママって欲しくない？」

「ママ？」

「そう、ママ。良かったら、私がイリアのママになってあげてもいいかなーって」

イリアは何故か迷う仕草を見せた。

「え、えと……………ま、ママ」

「うん、なに？」

「ママ！」

恐らく、母親と言う存在ができたことが嬉しかったのだろう。涙を目じりに浮かばせ、唯に抱きついていった。唯はそれを受け止め、優しく抱擁していた。

「……………クク」

外から見ると親子というよりも、姉妹、だがね。

そして、審判は下る（後書き）

本当はね、唯をイリアって名前にしたかったんだ。
どうもこんばんわ桜楼です。

本当は身体的特徴から唯をイリアにしたかった。銀髪に赤っぽい目。完璧にイリヤじゃん。

さて、エミヤシロウがパパと呼ばれてるところを想像すると、さぞかし微笑ましい光景になるのだろうなあ、とか思ってみたりしてるんですが……さて、これからどうしよう。

イリアを登場させたのはいい。うん、いいでしょう。

だが、そのイリアをどういう立ち位置にするか。魔術を士郎から教わっていき、最終的にはエクソシストに入団するか。このまま、士郎たちの娘として育てていくのか。

はあ、俺はどうすればいいのだろう。

……すいません、限界です、眠いです、寝ます。

……あ、評価とか感想とか、あとは疑問点などがありましたらお伝えください。

そんなこと、許されるはずもないのに

一体、どれだけの道を歩いてきたのだろう。

終わりが見えない道を、歩き続けてきた。

一点の明かりもない真っ暗な道を。

答えを求めようと、歩き続けた。

英雄が言った一言が解った。

「君は、私の様になるなよ」

正義の味方なんて、求めてはいけないものだったのかもしれない。

正義なんて、ただ悪を悪と決め付け、悪を殺すだけじゃないか。

悪は自らの正義を以て悪を成すというのに、俺はその悪を踏みに
じってきた。

借り物の正義を糧にして、自らの正義を持つ者を蔑にしてきたの
だ。

俺は……俺はこんなことのために、正義の味方になったのではな
い……！

なぜ、俺は生きていられる？

これだけの人を殺してきた。

多くの人を救うために、少なくとも数の人を殺してきた。

そんな俺に、なぜ生が許される……！？

ふと、思った。

「ああ、日本に帰りたい」

正義を目指した男は、幸せを求めようと思った。

また、妹と共に暮らしたいと。

あの頃の生活に戻りたいと。

そう、思ってしまった。

そんなこと、許されるはずもないのに。

「はぁ……はぁ……」

なんだか、嫌な夢を見た気がする。

酷く、喉が渴いている。寝汗でベッドは濡れている。未だに、汗は噴き出るのを止めない。

「……まったく、嫌になる」

朝からこんなでは、目覚めが悪い。少し、紅茶でも飲んで落ち着

こうと思った。しかし、落ち着く時間は意外な存在に奪われることとなった。

「パパ！ ママが朝ごはん作ったから、早く食べよって」

部屋の扉が突然開いた。ああ、それは極普通のことだ。唯はいつもノックをしない。しかし、そこに来たのが金髪碧眼の幼子だったら、驚くだろう？

まあ、その金髪碧眼の幼子が顔も知らない人だったらもっと驚いただろうけど。

「……そうか。じゃあ、行こうかイリア」

「ん！」

イリアス・バニングス。

何故か、俺と唯を「パパ」と「ママ」と呼ぶ子供。外見年齢、精神年齢、共に小学低学年程度。おとなしい子だと思っていたのだが……心を許したのか、今は大きな声を出すことも多い。なにより、元気な子になった。

と、言っても、イリアが来たのは昨日なのだが。

イリアに手を引かれ、朝食を取るべく、ダイニングキッチンへと向かう。

「イリア。何も、そんなに急がなくても良くないか？」

そんなことを言う俺は、本物の父親に見られてもおかしくないのだろうか。

「だってお腹すいちゃったんだもん♪」

「……ふむ。なら急がなくてはな」

「ママ、パパ連れてきたよ！」

「ん、ありがとイリア」

「……なんというか、本当に主婦の様だな。唯」
食卓を用意する様など、正に母親のそれだ。

「お兄ちゃんこそ……」

ああ、唯はまだいいだろう。背が低く、外見が幼い。しかし、俺は……。少し若返っているとは言え、外見的にはイリアの父親であってもおかしくない。まあ、少しでも若返ってくれたという運命に感謝するべきなのかもしれない。

「はぁ……任務は当日に報告してください、と言ったのをお忘れになったのですか、桐谷二番隊部長？」

「えーっと……ごめっ！」

さて、朝食を終え朝のお勤め。イリアには悪いが、今日はお留守番だ。最初は駄々をこねたが、仕事だからと言ったら意外にもおとなしく見送ってくれた。

それは良かったのだが……どうも、昨日はいろいろ大変なことが多かった。故に、任務報告を忘れていた、ということだ。

「桐谷士郎副部隊長も、そんな他人事みたいな顔で……。ちゃんと聞いているのですか？」

「ああ、安心したまえ。ちゃんと聞いているよ。……そうだな、ユリも俺のことはシロウと呼んでくれ。お堅い肩書は、仕事上だけにしよう」

「今もその仕事の途中のはずですけど？」

むう……誤魔化せないか。

「まあいいです。で、結果的にはどうだったんです？ 吸血鬼は」

唯は、どう答えるか困っている様だった。

……仕方ない。不審に思われる前に、さっさと答えてしまうことにしよう。

「結果的なことだけを言えば、吸血鬼はいなかったよ」

唯は、驚いた様な顔をした。

まあ、平然と嘘をついているのだから、驚くのも分かる。しかし俺にとっては、生前でいろいろな交渉事、基^{もと}嘘を重ねてきた。星の数に等しい数の嘘を吐き、砂漠に見える砂粒以上の嘘を聞いてきた。俺にとって、平然と嘘をつくことが当たり前になってしまっている。「……任務の遂行途中に『何か』があった。そんなことを思わせる様な口ぶりですね」

さすが、ユリは頭がよく回る。

「ああ、そうだ。吸血鬼はいなかったが……その……吸血鬼だと勘違いしてしまった幼子がいてね。随分と不健康な生活をしているようだから、取り敢えず保護する形に収めた。……まあ、当分はこちらに任せてほしい」

その報告に、ユリは半ば呆れながらもジト目で言った。

「本当のことを言っただけです？」

「……ん？ 全て本当のことだが？」

少し足掻いてみよう。

「はあ……まあいいでしょう。今は不問にしますが……エクソシストを甘く見てはいけない。これはエクソシストである私からではなく、ユリとしての私からの忠告です。いずれ、ばれることになるはず。あなたはそれでも、その幼子を保護するのですか？」

俺は、少し躊躇った。

『エクソシストを甘く見てはいけない』。ああ、分かっていると。これほどの結束力を持つ組織を、俺は見たことがない。

「……まあ、それなりの覚悟はできているよ。それでも、『パパ』なんて呼ばれている身でな。そう呼ばれているうちは、守り抜こうと決めたのさ」

「ふふ。『パパ』ですか。随分と可愛い吸血姫の様ですね」

実に愉快だ、という様に笑うユリ。

「ああ、まったく。子を持った親の気持ち解するというものだ」

「まあ、大したことはできませんが、助けが必要なきはこれを使ってください」

そう言って渡されたのは魔法陣が描かれた一枚の紙だった。

「使用方法は唯が知っているはずだから。まあ、精々がんびりなさ
い！」

いつもの彼女からは想像もつかない口調で言った。いや、これがいつもの彼女なのだろう。

「っふ、言われなくても。守ってみせるさ。正義の味方を目指した男の力を侮ってもらっては困る。それに、唯もいるしな。唯になら、十分に背中を任せられる」

その言葉に、唯は何故か頬を染めた。

ふむ……なにか恥ずかしくさせる様なことを言っただろうか？

「随分、信用……いや、信頼なされているんですね。とてもいいパートナーに出会えましたね、桐谷二番隊部隊長」

その時既に、彼女はエクソシストのユリに戻っていた。

任務は受けず、ケーキ屋へ向かう。イリアを留守番させたのだから、これくらいの報酬はあってもいいだろう。たとえイリアが、吸血鬼であっても。

「「ただいま」」

玄関に入る。そして、イリアの声が

「……………」

聞こえない……？

おかしい。俺の予想では、イリアは嬉しそうに笑いながら出迎えてくれると思ったのだが……。唯もおかしいと思ったのか、眉を八の字にしている。

何か嫌な違和感を家の中に充滿している。

そして、ダイニングキッチン。誰もいない。

イリアの部屋。いない。

唯の部屋、俺の部屋。いない。

「……唯。イリアの魔力って感じ取れるか？」

「残念だけど、イリアの魔力は小さすぎて……。でも、ひとつだけ違う魔力が混ざってる。頑張れば、道を辿れるかも」

そう言って、瞳を閉じ、集中する。

十数秒後、唯の瞳が開いた。

「……嫌な予感しかないわ。イリアがつれていかれたのは、あの死山よ」

「何故だ……」

「たぶん、悪魔。イリアは吸血鬼だから、悪魔がそれを利用しようしたと考えれば……」

いや、おかしい。イリアの魔力は感じ取れない程に小さい。悪魔がイリアの正体に気付くはずがない。ならば、始めからイリアを狙っていた？

あの町はずれの洋館に俺達が行った時から、悪魔がついてきていたとすれば？

隙を見て、イリアを連れ去ったのだとすれば？

「クソ……。本部に連れてったほうが安全だったって訳か……」
なんたる失態。

イリアの魔力は無いに等しいのだから、連れていくべきだった。少なくとも、今日で気付かれるはずもなかった。気付かれたとしても、あの魔力の量からして、処分命令も下らなかったかもしれない。後から後から、後悔が押し寄せる。

「……後悔は後だな。唯、行こう」

「うん……」

死山に登る途中、クロキがいた。なぜ？

「何をしているんだ、士郎」

「それはこちらのセリフだ、クロキ。何故君がここにいる」
はっ！

いかんいかん、今はクロキなどと話をしていない場合ではない。

「すまないクロキ。今は急いでいるんだ。唯、急ごう」

「悪魔……或いは吸血鬼を、助けに行くのか？」

……なに？

「吸血鬼、だと？」

「なんだ、違うのか？ 悪魔と吸血鬼が手を組んだなんて情報が入ってな。俺はその情報を確かめるためにここにきた」

情報はやいなオイ！ いや、イリアが悪魔と手を組むだなんて思えないから、勘違いだろう。

ああ、しかし……やはりエクソシストは恐ろしいということか。

「残念だが、クロキ。君と話をしている暇はないんだ。先を急がせてもらう」

「ごめんね、クロキ副部隊長。そういうことだから」

唯は、気分が悪そうな顔をしながら俺の横に並んだ。

「……気をつけろよ」

クロキの声が、小さく聞こえた。

「っふ、誰に言っているのか分かっているのかね。クロキ」

聞こえないと思うが、それに答えておくことにした。

そして、この前と同じ頂上にある穴に入った。

「……やはり、というべきか」

「……………」

唯は、怒りに拳を固め、血が出るのも構わずに下唇を噛みしめていた。

俺も、唯並に……否、それ以上に怒りを覚えた。

穴の中は、この前来た時と違い木の根の様なものが、壁に張り巡らされている。

そして、その木の根の中に、何故か裸体のイリアがいた。それ、かなり高い位置に。

「おい、いるんだろ悪魔。さっさと出てこい」

俺の言葉に、相手は素直に姿を現した。

「っふふ。ようこそエクソシスト諸君。君達は、この世の最後を見届ける権利を得た。喜びたまえ」

男は、大声でそう言う。

「……嬉しくないな。折角、楽しい生活が待っていると思っていた矢先に、こんな茶番に付き合わされるとは」

俺は、なるべく感情を抑え、言った。

——投影、開始。

馴染んだ感触。二刀の夫婦剣。干将・莫耶の感触を確かめ、男に向かつて放り投げた。

「ふん、その程度の投擲で、この私がどうにかなるとでも？」

勿論、弾かれる。

「いいや、思ってたのではないさ。——投影、開始」

更に干将・莫耶を投影。

「ほう……転送系の魔術ではないのか。興味深いな」

そう言う間にも、干将・莫耶は男を貫かんと迫りくる。

——投影、開始。

干将・莫耶を、また投げる。

それを数回繰り返す。すると、莫耶は干将に、干将は莫耶に引き寄せられる。その様はまるで剣舞。

「ぬ、ぬう」

男は、いつの間に持っていたのか一振りの剣で干将・莫耶を弾いていく。

「悪魔と天使は踊り狂うかのように自らの身を貫き通す 今、我らのために武具を作り出せ

天地貫く逆巻く槍！」

唯の詠唱と共に、空気中の魔力が凝縮されていく。そして、魔力の凝縮体は槍の様な形になっていく。

「はあ！」

唯の気合の一声と共に、槍是一直線に悪魔に向かって投擲される。

「っふ」

悪魔は、不敵に笑った。

「荒れ狂う 夕闇の刃 全てを殺す滅びの剣！」
ガラディーン

男の持つ剣が、黒く染まっていく。そして、

「はああ！」

剣を振り回し、俺の干将・莫耶は愚か、唯の槍さえも破壊した。その黒い刃を見ると、悪寒を感じた。背中に、首に、心臓に刃を突きたてられる感覚に襲われる。

「くはは！ この程度かね？ ……教えてやろう。この剣は全てを
ガラディーン

殺す滅びの剣。貴様等の軟弱な剣の破壊など容易いものだ」

ガラディーン。確か、クロキもそんな名前の剣を使っていた。だが、形状が違う。どういうことだ？

「ふふ。さあ、終焉の時だ」

悪魔は、浮遊した。……………は！？

飛んだ。悪魔が、空中を。

「驚くことなかれ。浮遊術は、高度な技ではあるが、長生きできれば簡単に習得できるよ」

そして、男は裸のイリアの喉へ、その刃を向ける。

「何をする気！？」

唯が声を荒げる。

「この吸血鬼はな、魔力容量がとても大きいのだよ。普通ならば、血を吸うのだがね……。自ら魔力を必要としない吸血鬼も珍しいものだがね。……今から、この子の体に私の魔力を流し込む。すると、この子の体は耐えきれない。なぜなら、長い間この子は魔力を蓄えていなかったから。体が突然の魔力に耐えきれないのだ。そして、そうするとこの子は自我を失い暴走する。魔力が尽きるまで暴走は収まらない。その暴走は、この世を破壊するのに十分なのだよ」

それだけ言うと、男はイリアの首を切った。それも、かなり深く。

「貴様……俺達の娘になにをする！」

無意識のうちに叫んでいた。両手には、勝利すべき黄金の剣。

「あああああ！」

脚力の強化をし、跳躍する。

————ドクン。

心臓が一つ。高くなった。理由は一つ。イリアの目が、開いたから。

「あれ、パパ？」

この子の前で、残酷な物を見せていいのだろうか。

そんな思考の邪魔の所為で、悪魔に返り討ちに合い、地面に叩きつけられる。

「がはっ！」

嫌な味が口に充滿する。肺に溜まっていた空気が強制的に排出される。

「パパ！　——っ！　痛……」

おそらく、首を切られたからだろう。痛いけど、その痛いところを手で押さえられなく、泣きそうに顔を歪めるイリアを見た俺は、全ての思考が吹っ飛んだ。

片足を突き、立とうとするが失敗。そして、その時。

——心は剣で出来ていた。

そんな言葉が頭に流れ、無意識のうちに言葉にしていた。

——自らの体を碎き、心を壊す。

なんだか、悲しい言葉が流れてきている様な気がする。

――幾億もの剣をこの手に収め。

いろんな感情が、入り乱れる。

――ただの一度も敗走は許されず、

――ただ一度の勝利も許されない。

――常に剣を持ち心を殺し、剣の丘から敵を討つ。

――故に、我が身は一人。

心臓が一つ。高く鳴った。

――しかしその心はきつと、無限の剣で出来ていた。

全てが、砕けた音がした。
聞き覚えのある音。恐らく、魔術回路の破損。

そして見覚えのない光景が、しかし、覚えのある世界が、そこに
あった。

そんなこと、許されるはずもないのに（後書き）

ええ、分かっているつもりです。

これを読んだ人が必ず思うでしょう。展開、急過ぎね？ と。

いや、ね。俺ももうちょっと親子の休日的なものとかが、幸せな日常を書いてからこんな風なのを書きたかったんですよ。

けどさ。なんか、ね。うん、あまり深く追求しないで……。

まあ、親子の休日だとかはおまけ的なもので書こうと思っていたいます。

しなみに、最後の方に固有結界の詠唱みたいながありますけど、固有結界ではないんです。固有結界に良く似た魔術なんです！

ちなみに、固有結界っぽい魔術の詳細は、未だ考えてる途中です。さて、どういう設定にしようかな……。

コメント的な感想だとか評価だとかしてくれと、マジ嬉しいですはい。

ガラディーン
全てを殺す滅びの剣

クロキの持つガラディーンとは、また違うガラディーン。それは、見る者に死の恐怖を覚えさせられる。というか、嫌でも

自分が死ぬイメージが脳内に流れる。

黒い刃は、どんな衝撃にでも耐えられる様に頑丈。まあ、エクスカリバーも耐えるんじゃないかな？（やっぱ曖昧）。

まあ、俺の適当なオリ武器なんですけどね。ガラディーンってフエイト／エクストラに出てきたっけ？みたいなこと思ったけど、気にしない気にしない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2856u/>

誰かの味方

2011年10月8日20時08分発行